

まき ばる
牧 原 遺 跡

日田市埋蔵文化財調査報告書

第 12 集

1997

日田市教育委員会

まき ばる
牧 原 遺 跡

日田市埋蔵文化財調査報告書

第 12 集

1997

日田市教育委員会



牧原遺跡 A区全景（南から）

序 文

九州のほぼ中心、古来より筑紫次郎と呼ばれ北部九州の繁栄を支えてきた筑後川の中流域に位置する日田市は、周囲を山々に囲まれた盆地で、その中央を水量豊かな三隈川（筑後川）が流れる、まさに山紫水明の地であります。

かつては天領のまちとして栄え、今に伝わる多くの文化財や古い町並みは「九州の小京都」と呼ばれ、また豊富な森林資源を活用した木材関連産業を中心に発展してまいりました私たちのふるさとにも21世紀の波が押し寄せてきております。

特に交通体系の整備はめざましく、九州横断自動車道は平成2年の朝倉－日田間の開通に続き、平成7年には日田－天瀬間が、8年には大分までが開通いたしました。

また、国道210号線の玉川バイパスや日田バイパスなど次々とアクセス道路が完成し、九州の交通の要衝としての日田がクローズアップされております。それはあたかも江戸時代に永山布政所から四方八方に街道・往環が通じていた、天領の時代を想起させるかのようであります。

今回報告いたします牧原遺跡は、日田市東有田と熊本県小国町とを結ぶ広域農道の建設に先立ち調査を行なった遺跡です。ここに刊行します本書はその成果をまとめたものでありますが、今後の学術研究、文化財保護活動に役立てば幸いであります。

最後に、調査から報告書作成までご指導・ご協力いただいた調査関係者の皆様、農政関係機関の方々に心から深く感謝申し上げます。

平成9年3月

日田市教育委員会

教育長 加藤正俊

例 言

1. 本書は広域営農団地農道整備事業に伴って調査を実施した『牧原遺跡』の発掘調査報告書である。
2. A区の調査は平成6年8月1日から11月21日まで、B・C区の調査は平成6年12月13日から平成7年1月25日まで実施し、整理作業は平成6年9月1日から平成7年8月31日まで行なった。
3. 本誌に使用した遺構の実測は坂本・田中・松下が行なった。遺物の実測は縄文土器については今田秀樹氏（天瀬町教育委員会社会教育課）の協力を得たほか、石器を土居が、その他の遺物を行時と松下が行なった。写真撮影は、遺構を坂本・田中・松下が行ない、遺物は、文化財写真家長谷川正美氏の撮影による。
4. 本書に使用した空中写真は、(有)スカイサーベイによるものである。
5. 本書に収録した遺物及び記録類は、日田市埋蔵文化財センターに保管している。
6. 第IV章の赤色顔料分析については本田光子氏（別府大学文学部助教授）に依頼し、あわせて玉稿を賜った。
7. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々に多大なるご指導、ご協力をいただいた。記して感謝いたします。
賀川光夫・後藤宗俊（別府大学）、川越哲志・安間拓巳（広島大学）、村上恭通（愛媛大学）、清水宗昭・渋谷忠章・宮内克己・高橋徹（大分県教育委員会文化課）、佐藤祐二（玖珠町教育委員会社会教育課）、大分県日田地方振興局耕地課関係者、野村照治（牧原千人塚土地所有者）
[順不同・敬称略]
8. 本書の執筆・編集は土居・行時と協議のうえ、松下が行なった。

本文目次

I 調査に至る経過と組織	1
II 遺跡の立地と歴史的環境	4
III 発掘調査の内容	6
1. 縄文時代の遺物	6
2. 古墳時代の遺構と遺物	8
(1) 方形墓	8
(2) 石棺墓	19
(3) 木棺墓	20
(4) 土坑墓	20
(5) 土坑	22
3. 近世の遺構	27
IV 牧原千人塚の調査	30
V 分析調査	35
VI まとめ	37

挿図目次

第1図 調査区周辺地形図 (1/2,500)	3
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	5
第3図 縄文時代遺物実測図 (2/3)	7
第4図 A区遺構配置図 (1/200)	9~10
第5図 1・2号墓実測図 (1/100)	11~12
第6図 1号墓周溝内木棺墓実測図 (1/40)	13
第7図 1号墓周溝内木棺墓出土遺物実測図 (1/3)	13
第8図 1・2号墓出土遺物実測図 (1) (1/3)	14
第9図 2号墓周溝内石棺墓実測図 (1/40)	15
第10図 1・2号墓出土遺物実測図 (2) (1/3)	15
第11図 3号墓実測図 (1/100)	16
第12図 3号墓第1主体部実測図 (1/40)	17
第13図 3号墓第2主体部実測図 (1/40)	17
第14図 3号墓出土遺物実測図 (1/3、1/1)	17
第15図 4号墓実測図 (1/100)	18
第16図 4号墓第1主体部実測図 (1/40)	19
第17図 4号墓第2主体部実測図 (1/40)	19
第18図 石棺墓実測図 (1/40)	20
第19図 木棺墓実測図 (1/40)	20
第20図 1号土坑墓実測図 (1/40)	21

第21図	1号土坑墓出土遺物実測図 (1/3)	21
第22図	2号土坑墓実測図 (1/40)	21
第23図	1号土坑実測図 (1/40)	22
第24図	2号土坑実測図 (1/40)	22
第25図	2号土坑出土遺物実測図 (1/3)	22
第26図	3号土坑実測図 (1/40)	23
第27図	4号土坑実測図 (1/40)	23
第28図	4号土坑出土遺物実測図 (1/3)	23
第29図	5号土坑実測図 (1/40)	24
第30図	5号土坑出土遺物実測図 (1/3)	24
第31図	6号土坑実測図 (1/40)	25
第32図	6号土坑出土遺物実測図 (1/8、1/3)	25
第33図	7号土坑実測図 (1/40)	26
第34図	8号土坑実測図 (1/40)	26
第35図	9号土坑実測図 (1/40)	26
第36図	10号土坑実測図 (1/40)	27
第37図	9・10号土坑出土遺物実測図 (1/3)	27
第38図	牧原千人塚 (1)	31~32
第39図	牧原千人塚 (2)	33~34
第40図	近世の街道 (小国街道)	40

表 目 次

第1表	土器観察表 (1)	6
第2表	石器観察表	6
第3表	土器観察表 (2)	28~29
第4表	鉄器観察表	29
第5表	牧原千人塚トレンチ出土土器観察表	30

図 版 目 次

巻 頭	牧原遺跡A区全景 (南から)
PL. 1	A区全景 1号墓全景 1号墓周溝内木棺墓
PL. 2	2号墓全景 2号墓周溝内石棺墓 3・4号墓全景 3号墓第1主体部 3号墓第2主体部 4号墓第2主体部
PL. 3	石棺墓 木棺墓 1号土坑墓 2号土坑墓 土偶出土状況 2号土坑 5号土坑
PL. 4	6号土坑 7号土坑 B区全景 C区調査風景
PL. 5	1・2号墓周溝および1号墓周溝内木棺墓出土遺物
PL. 6	3号墓周溝および3号墓第2主体部、1号土坑墓、4号土坑、6号土坑、 牧原千人塚トレンチ出土遺物 縄文時代遺物

I 調査に至る経過と組織

1. 調査に至る経過

平成4年5月22日付で日田市教育委員会に対し、大分県日田地方振興局より広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書が提出された。それによると、平成5年度工事実施予定地のうち大字日高字牧原の工区には、周知遺跡である大部遺跡^(注1)と千人塚2号墳^(注2)が存在することから、市教育委員会では路線や工法の変更などについて県耕地課と協議を行った。その結果、県耕地課は計画の変更は難しいとの回答を示したが、1. 掘削して工事を行うと発掘調査に要する経費や期間がかかり、2. 千人塚2号墳は市の指定文化財に値する塚であることから、路線内の一部をトンネル工法とすることとなった。

また、千人塚2号墳の重要性をかんがみ、その周溝が一部路線にかかることを考慮し、千人塚2号墳の確認調査を行うこととした。

変更不可能な範囲と取付道のB区については平成6年3月15日から同月22日まで試掘調査を実施した。試掘調査は工事により削平が予定されている丘陵の頂部にトレンチを設定して行った。その結果、竪穴住居跡など古墳時代の集落とみられる遺構と遺物が検出された。古墳に近接して集落が存在する貴重な遺跡であるため県耕地課とその取扱いについて再度協議を行い、掘削予定地の約2,000㎡を対象とした発掘調査(A区)を実施することとした。発掘調査は平成6年8月1日から機械による表土除去作業を、また8月3日から遺構検出作業を開始し、11月10日に空撮を行い、11月21日にすべての発掘作業を終了した。

また、平成6年12月13日から平成7年1月25日までB区の発掘調査と、橋脚部にあたる玖珠川左岸沖積地(C区)の試掘調査を行った。B区は先の試掘調査時に土師器が出土しておりA区と同様に住居跡の存在を想定していたが、調査では遺構が発見されず、遺物から奈良時代の包含層であることがわかった。さらに、C区については現況が水田と畑地で、掘り下げたところ耕作土の下は砂層で遺構の存在は認められず、遺物も流れ込みとみられる陶磁器の破片等しか出土しなかったため、発掘調査は行わなかった。

なお、遺跡名については大部遺跡として周知されている範囲内に属してはいるが、調査地区を適切に判断できるように小字名をとって“牧原遺跡”とし、本報告以降遺跡名を変更することにした。また前述のようにB・C区では特筆すべき調査成果が得られなかったため、以下ではA区にしぼって報告することとする。

(注1) 田中裕介「手崎遺跡 大部遺跡」一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ 大分県教育委員会 1992

(注2) 確認調査の結果、中世の「牧原千人塚」であることがわかった。本文P.28参照。

2. 調査の組織

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤 正俊（日田市教育長）

調査事務 原田 良伸（日田市教育委員会文化課長）～平成8年3月

原田 俊隆（ “ ” ）平成8年4月～

財津寅日出（ “ 課長補佐）～平成8年4月

長尾 幸夫（ “ ” ）平成8年4月～

吉田 節子（ “ 主任）～平成8年3月

森山 一宏（ “ ” ）平成8年4月～

調査担当 坂本 嘉弘（大分県教育委員会文化課主査）現大分市歴史資料館主幹

田中 裕介（ “ 主任）

松下 桂子（日田市教育委員会文化課主事補）

調査員 土居 和幸（ “ 主任）

行時 志郎（ “ 主事）

永田 裕久（ “ 主事補）平成7年4月～

森山敬一郎（ “ 囑託）

発掘作業員 梶原みとし・横尾テル子・宇野アサエ・坂本今朝人・坂本都美子・原田 国介

原田 友枝・宇野 京子・梅木 鈴子・木下 カネ・毛利四郎三・宇野ヒトエ

益永 勇・刎 留造・横尾ノブ子・江田美代子・五島 英司・清水 忠造

高尾 勝・高尾 幸生・梶原 勇雄・梶原スミエ・金崎 克己・金崎ハキヨ

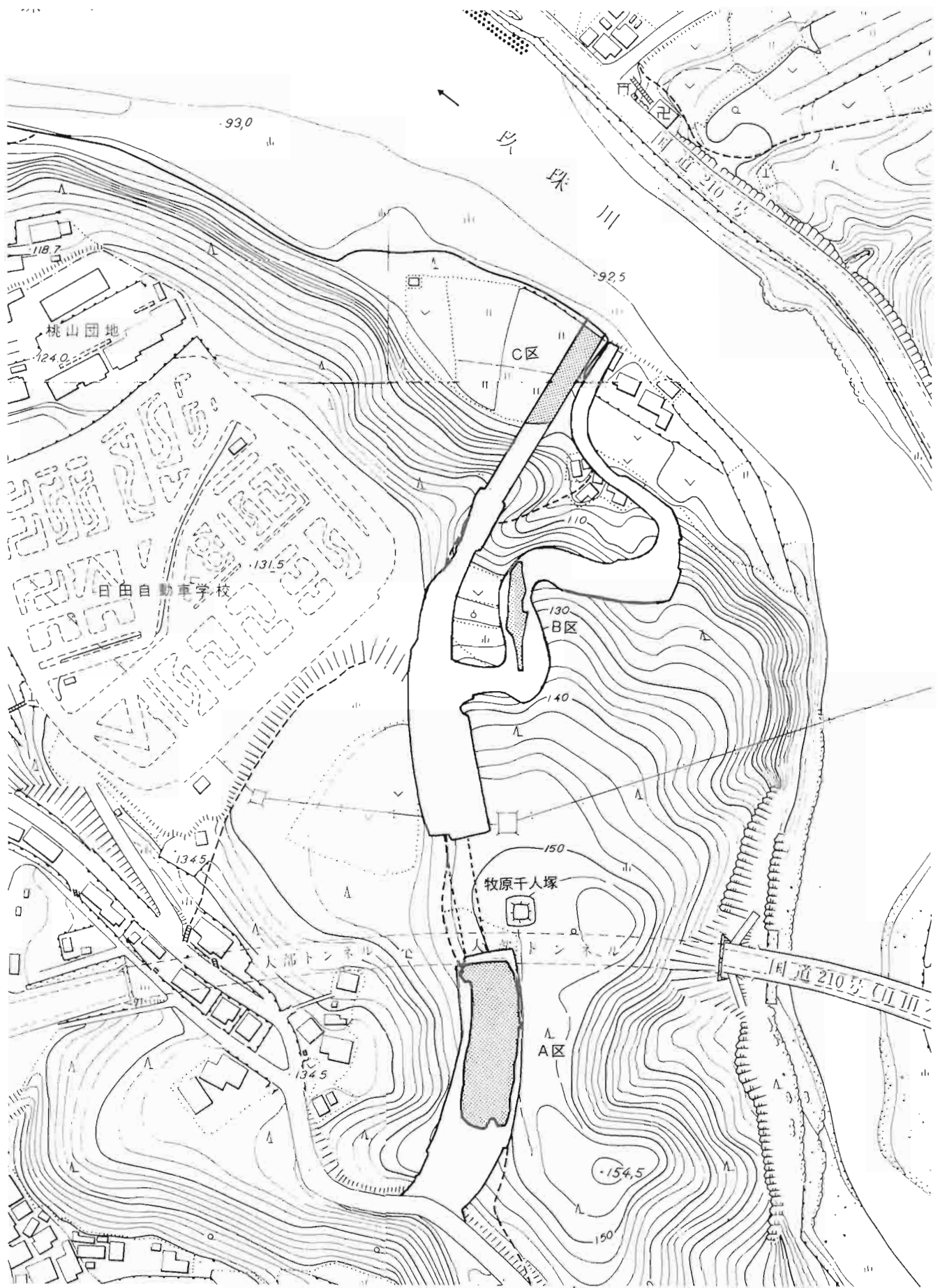
梶原 富子

整理作業員 松本佳世子・小埜 和美・聖川 暢子・石松 京子・小野 敦・保坂真千子

羽野 恭子・木藪 ふみ・井上 幸恵



発掘作業員のみなさん



第1図 調査区周辺地形図 (1/2,500)

II 遺跡の立地と歴史的環境

牧原遺跡は大分県日田市大字日高字牧原に所在する。

遺跡のある日田市は大分県の西部、九州北部のほぼ中心にあり、福岡県と隣接する。地形的に見ると、標高80～100mの沖積平野、阿蘇溶岩や耶馬溪溶岩からなる平坦な台地（通称「原」と呼ばれている）、筑紫溶岩系の山地が同心円状に形成された盆地である。市の中央部を東西に流れる三隈川（筑後川）は久住山・阿蘇外輪山を源流とする九州最大の河川で、大小数多くの河川と合流して筑後川水系を形成しながら有明海にそそぐ。日田の歴史においてこの三隈川が果たした役割は大きく、弥生時代の首長墓とみられる甕棺墓が発見された吹上^(注1)遺跡や、市内に残る4基の装飾古墳^(注2)などの在り方から、三隈川の河川交通を媒体として北部九州の文物や文化をダイレクトに受け入れていたことがわかる。通常では盆地という地形は周囲から孤立しやすく、独自の文化を築きあげることが多いが、日田盆地の場合はその地理的位置と河川交通のため、むしろ文化のクロスロード的な役目を担っていたようである。

さて、次に牧原遺跡の周辺について概観してみよう。

牧原遺跡が立地しているのは東から玖珠川、南から大山川が合流して三隈川となる地点で、五馬台地から北へのびる標高150m前後の丘陵頂部である。丘陵の下に広がる沖積地は極端に狭く、現在国道212号線が通るすぐそばは大山川の河原が広がっており、非常に不安定な土地であることが容易に想像できる。牧原遺跡の眼下の丘陵では団地造成や自動車学校建設の際に土器などが出土したといわれている。牧原遺跡より西の丘陵斜面には大部遺跡があり、平成3年度の調査で縄文時代早期の集石遺構や後・晩期の包含層、古墳時代後期から奈良時代の焼土壌などが検出されている^(注3)。大山川の対岸には、縄文時代後期の住居跡、古墳時代から奈良時代の集落、中世の土壌墓や掘立柱建物などからなる手崎^(注4)遺跡がある。

(注1) 土居和幸・永田裕久『吹上遺跡－6次調査の概要－』日田市教育委員会 1995

(注2) 賀川光夫『法恩寺古墳』日田市教育委員会 1959

小柳和宏ほか『グラントヤ古墳群』大分県日田市所在装飾古墳の調査報告 日田市教育委員会 1986

渋谷忠章・村上久和ほか『大分の装飾古墳』大分県文化財調査報告書第92輯 大分県教育委員会 1995

(注3) 田中裕介『手崎遺跡 大部遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ 大分県教育委員会 1992

(注4) 注3に同じ

田中裕介・高島豊『上野第1遺跡（平原地区・米田地区） 上野第2遺跡 手崎遺跡（2・3次）』一般国道210号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ 大分県教育委員会 1994

【主要参考文献】後藤宗俊・土居和幸ほか「第I編 先史・原史」『日田市史』日田市 1990

中島国夫「日田盆地のなりたち」『日田市三十年史』日田市 1974

小田富士雄「古代の日田」『九州天領の研究』1976



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- 1 小迫辻原遺跡 2 吹上遺跡 3 北友田横穴群 4 徳瀬遺跡 5 護願寺古墳群
 6 上野第1遺跡 7 石幢 8 日隈古墳 9 月隈横穴群 10 慈眼山瀬戸口遺跡
 11 夕田横穴群 12 佐寺原遺跡 13 水目横穴群 14 赤迫遺跡 15 馬形遺跡 16 会所宮遺跡
 17 元宮遺跡 18 鳥羽塚古墳 19 鬼塚古墳 20 柳ノ本遺跡 21 会所山古墳 22 法恩寺山古墳群
 23 上井手遺跡 24 東寺横穴群 25 東寺原遺跡 26 姫塚古墳 27 陣が原遺跡 28 永平寺跡板碑
 29 惣田塚古墳 30 惣田遺跡 31 手崎遺跡 32 千人塚1号墳 33 牧原遺跡 34 牧原千人塚

Ⅲ 発掘調査の内容

今回の発掘調査では、古墳時代の墓地遺構・土坑、近世の道状遺構のほか、縄文時代の遺物が出土しており、以下時代に沿って記述する。

1. 縄文時代の遺物（第3図）

調査区内では当該時期の遺構や包含層は検出されなかったものの、方形墓の周溝などから流れ込みの状態で、縄文土器や土偶・石器が出土している。

縄文土器（1～3）

1～3は1号墓周溝内木棺墓から流れ込みの状態で出土した縄文土器で、浅鉢である。

土 偶（4）

1号土坑墓の最上層から出土した土偶の左脚部分である。現存長4.5cm、足裏は直径2.3cmの平坦な円形を呈し、この部分だけでも直立するほど安定している。丸い脚部に足首をややすばめてつま先を表現し、また通常の土偶より下がった位置に腰骨を表現する。縄文土器とよく似た胎土・色調で、表面は磨滅のためわかりにくいミガキと思われる。

石 器（5～10）

5・6は2次加工剥片である。5は表面のほぼ全周と裏面の打面周辺に、6は不定形の剥片の右側辺部に裏面からの加工が、それぞれ施されている。6は一部に自然面を残す。7～9はスクレイパーである。7・9は縦長剥片を利用したもので、7には下部に両側から、9には右側辺縁部に加工が施されている。8は横長剥片を素材としており、表面下部に裏面方向からのみ加工が施されている。8は打面部を中心に、9は裏面および打面に自然面を残す。10は磨製石斧の刃部破片で、全体的に丁寧な研磨が施されている。

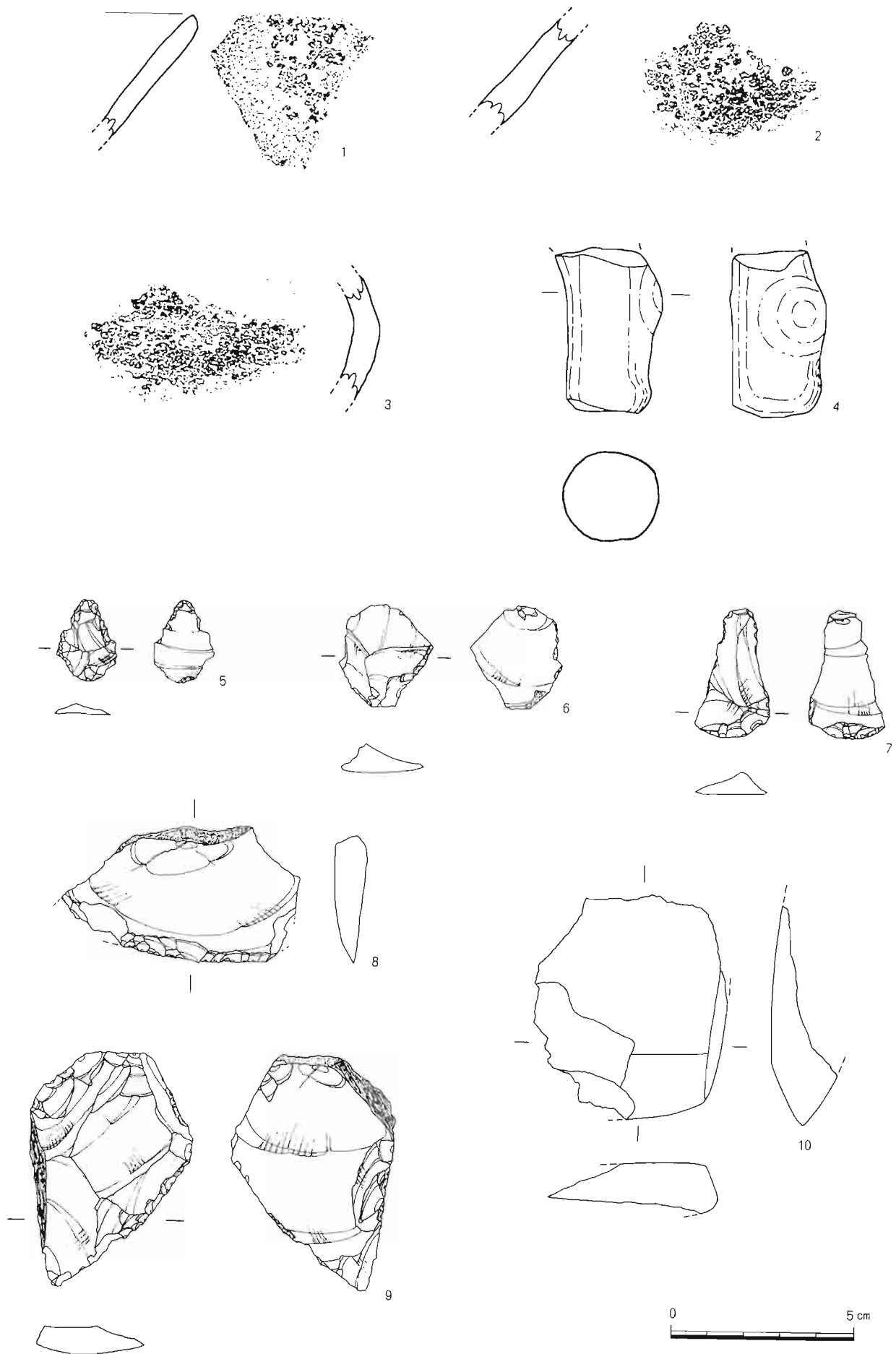
第1表 土器観察表（1）

種図番号	遺物番号	種 別	器 種	調整（①外面 ②内面）	色調（①外面 ②内面）	胎 土
3	1	縄文土器	浅 鉢	①ミガキ ②磨滅のため不明	①黄褐色 ②淡黄褐色	角閃石、長石、石英、白色粒子
〃	2	〃	〃	①巻貝条痕後ミガキ ②ミガキ	①黄褐色 ②淡黄褐色	角閃石、長石、白色粒子
〃	3	〃	〃	①磨滅のため不明 ②ミガキ	①淡黄褐色 ②淡灰褐色	角閃石、長石、白色粒子

第2表 石器観察表

単位：cm

種図番号	遺物番号	種 別	器 種	最大長	最大幅	最大厚	備 考
3	5	黒 曜 石	2次加工剥片	2.2	1.6	0.25	牧原千人塚トレンチ出土
〃	6	チャート	〃	2.8	2.4	0.75	2号墓周溝出土
〃	7	安山岩	スクレイパー	3.5	1.9	0.6	1号墓周溝出土
〃	8	〃	〃	6.4	3.6	0.9	2号墓周溝出土
〃	9	〃	〃	5.9	4.5	1.1	表 採
〃	10	不 明	磨製石斧	—	—	—	1号墓周溝出土



第3図 縄文時代遺物実測図 (2/3)

2. 古墳時代の遺構と遺物

この時期の遺構としては、方形墓4基、石棺墓・木棺墓各1基、土坑墓2基、土坑10基が検出された。土坑は遺物を含み、方形墓内につくられたものもあることから墓の可能性もあるが、プランが不定形であり掘り方も明確につかめなかったためここでは土坑として扱う。遺構は調査区の東半に4基の方形墓がほぼ直線的に連なり、その間隙にその他の遺構が配置されている。調査区南側と西側は斜面となっているため、遺構の確認はできていないが、北側と東側は平坦な部分が続くことから遺構が広がると考えられる。

(1) 方形墓

ここでいう方形墓とは、一定面積の墓域内に盛土を行い埋葬主体部を設けた墓をさす。本来は周溝によって墓域を方形に画したもののみを称するのであるが、形のはっきりしない2号墓や周溝を持たず盛土を行っている4号墓もその属性からここでは方形墓の範疇に加えておく。

1号墓（第5図）

調査区の北端に位置し、一辺12.6m×11.2mの方形の周溝で区画される。周溝の西側は2号墓の周溝と切り合うが先後関係はつかめなかった。周溝は幅約1.7m、深さ約0.3mで、東側と西側で溝の一部が途切れて陸橋となっている。周溝で区画された内部では埋葬施設が全く確認されなかったが、周溝には石棺材と考えられる安山岩が散乱しており、主体部は組合せ箱式石棺墓であった可能性が高い。おそらく造墓当初は盛土があったものと思われる。

1号墓周溝内木棺墓（第6図）

1号墓の西側周溝内で検出された墓で、長さ2.7m、幅0.9m、深さ0.6mを測る。棺材は残存していないが、床面には木板をはめ込んだ掘り方が残っており、側板で小口板を挟む形態であることがわかる。床板の存在については不明である。1号墓の周溝と方向がほぼ一致しているため、1号墓と同時かもしくは1号墓築造直後に造営されたと考えられる。

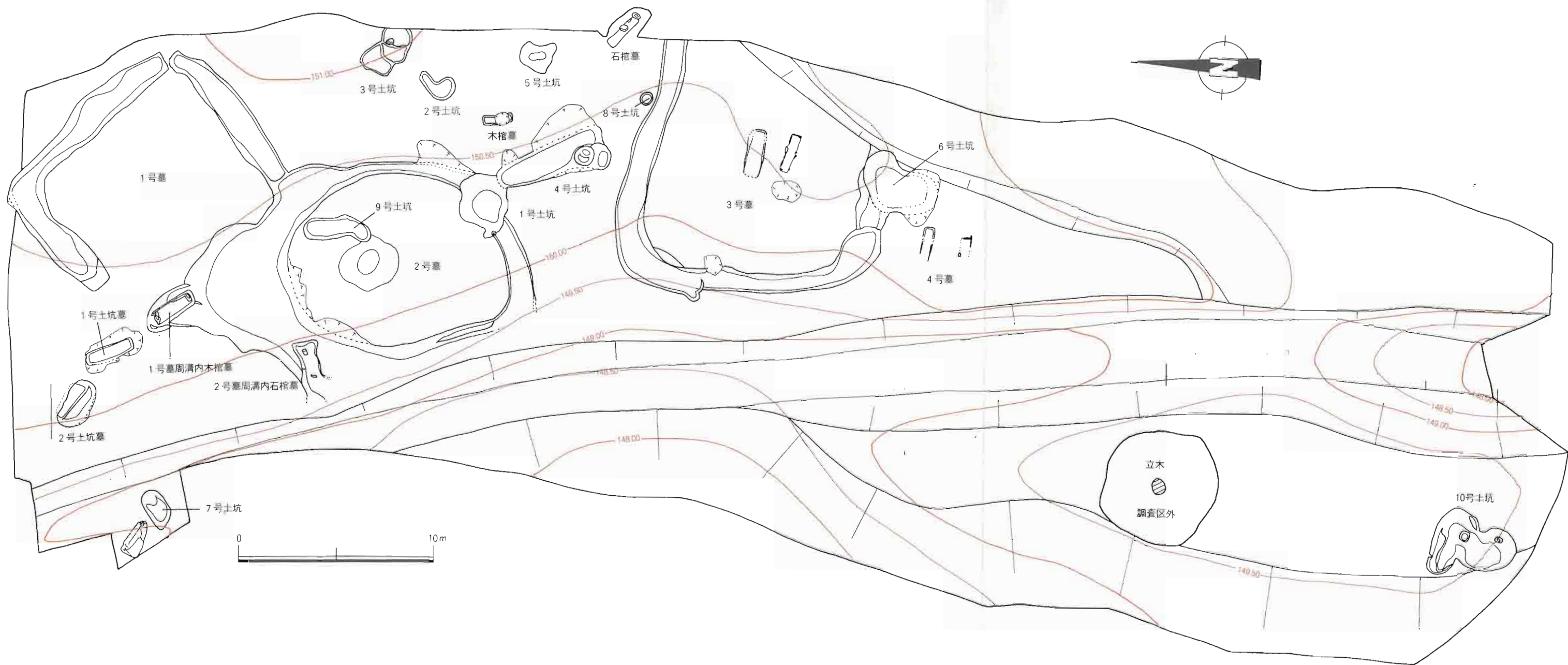
1号墓周溝内木棺墓出土遺物（第7図）

埋土中から土器片などがいくつか出土したが小片が多く、また周溝内につくられた墓であることから確実にこの木棺墓に伴うかどうかは疑わしい。木棺墓の埋土中にあり図化が可能なものについて説明する。

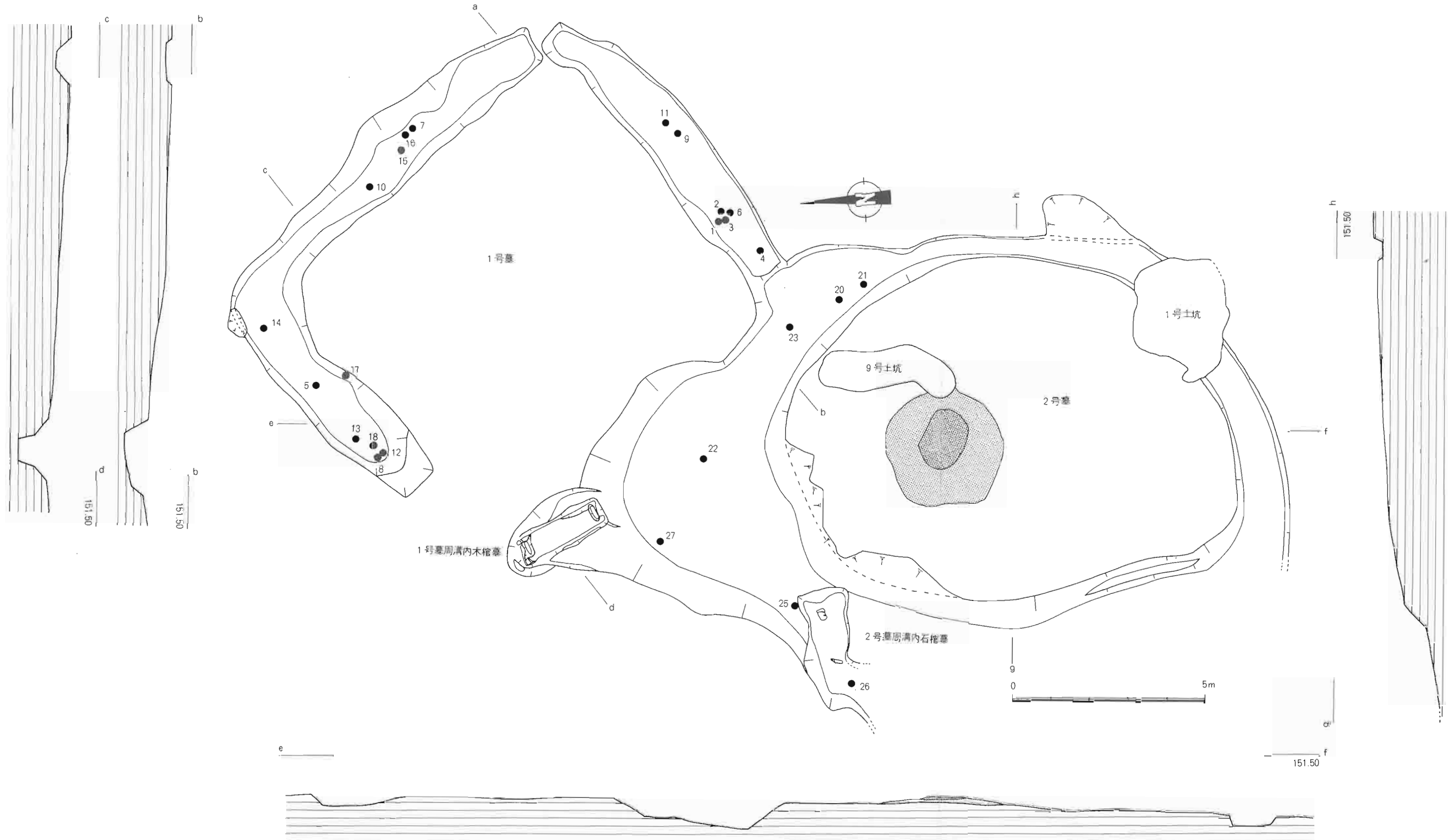
1・2はともに墓坑の上層、周溝底との境界付近で出土した。1は土師器の甕で、器壁が薄く、口縁がやや内湾気味である。2は鉄器で、途中で破損しているが一端は人工的にもしくは土圧によって湾曲し、もう一端には目釘状の突起がある。形態的には馬具もしくは鉞と思われる。

2号墓（第5図）

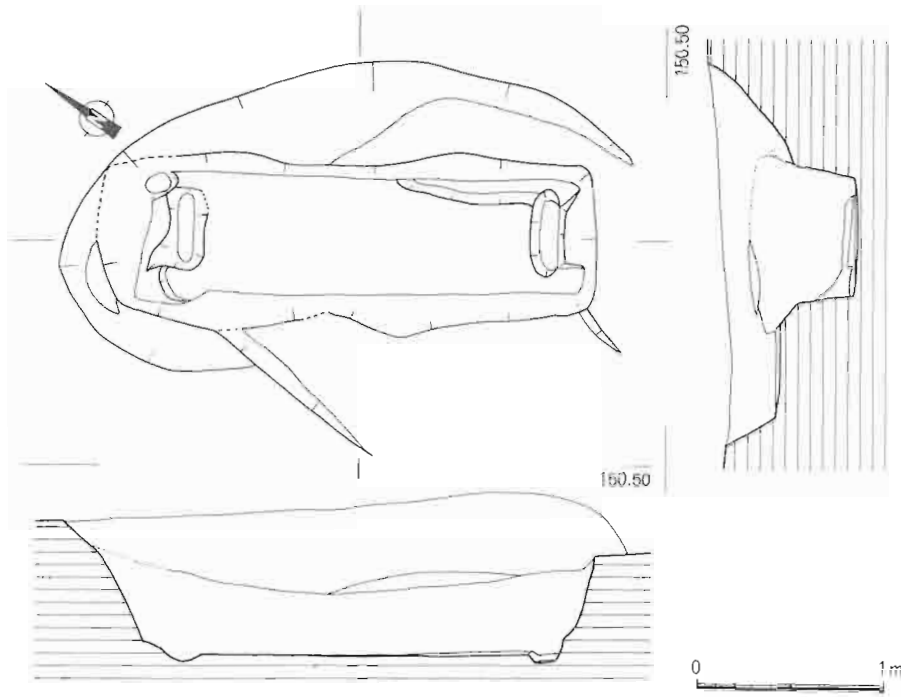
1号墓の南に位置し、楕円形の周溝が巡っているように見えるが、1・3号墓が方形に周溝を巡らすことから、本来は方形の溝を意識してつくったものであろう。北側は1号墓の周溝と切り合う。周溝は幅0.5~2.9+ α m、深さ約0.7mを測り、ほぼ全周すると思われるが、西側は近世の道状遺構によって削平されており規模は不明である。周溝の内側には中心からやや北に赤色顔料の厚い層がみられ、位置的にもここに主体部が存在したと考えられるため、トレンチを入れてみ



第4图 A区遗构配置图(1/200)



第5图 1·2号墓实测图 (1/100)

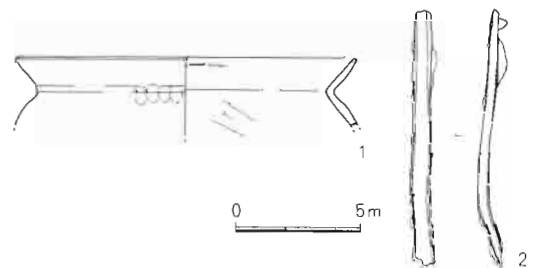


第6図 1号墓周溝内木棺墓実測図(1/40)

たが主体部の構造の痕跡は確認できなかった。
赤色顔料の残存状況から、おそらく造墓当初は盛土を行い、主体部は後世に削平を受けたと推測される。

2号墓周溝内石棺墓(第9図)

2号墓の西側周溝内で検出された遺構である。周溝の検出面では確認できなかったため、少なくとも2号墓周溝が埋没した後に掘られたものではないことがわかる。墓坑内からは板石が2



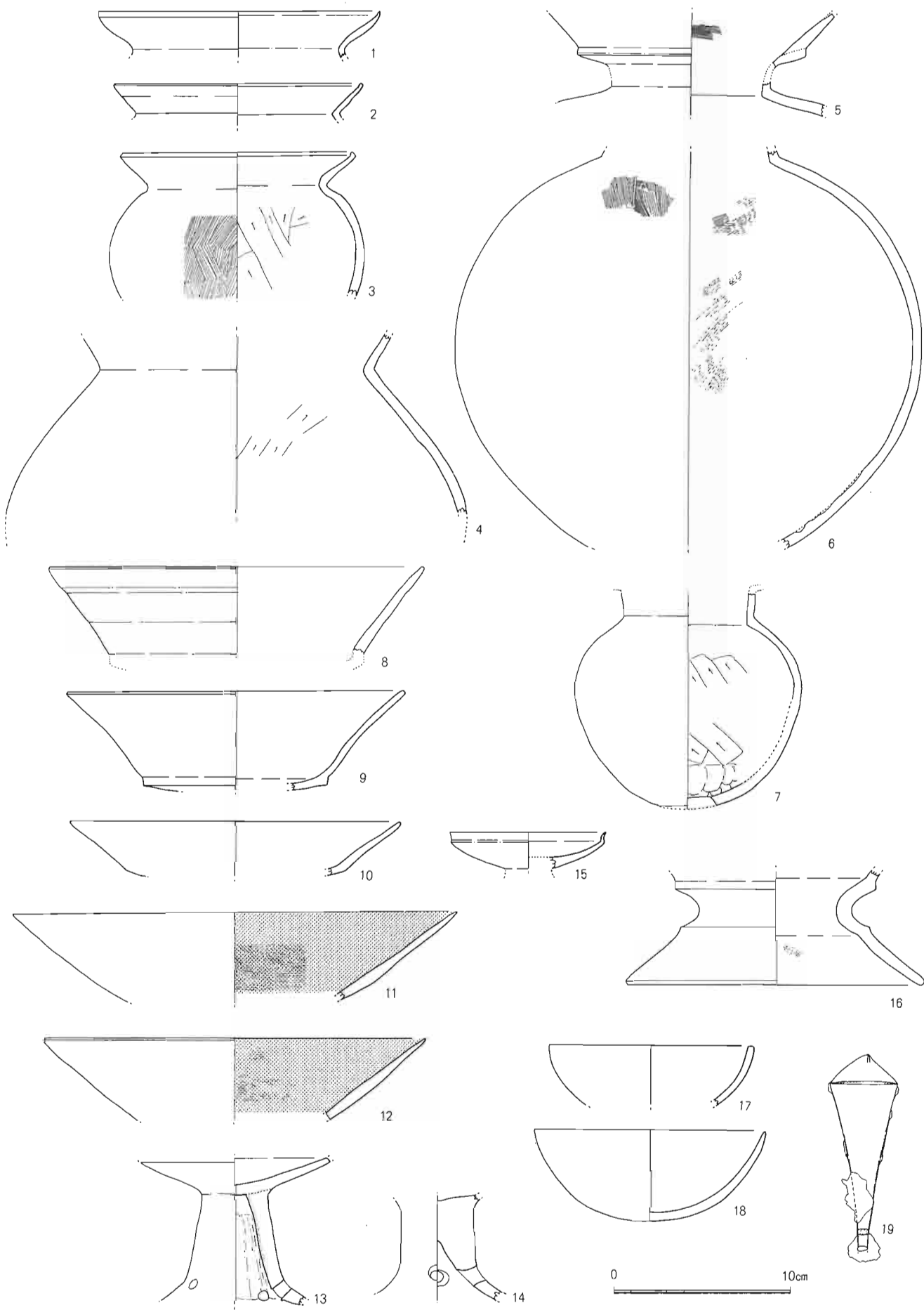
第7図 1号墓周溝内木棺墓出土遺物実測図(1/3)

枚検出されたが、いずれも床面から浮いた状態であった。また床面は平坦ではなく起伏があり、石棺の掘込み等は確認されなかったことから、石棺は後世に破壊され、石棺材を抜き取られたものであろう。

1・2号墓出土遺物(第8・10図)

周溝内から多くの遺物が出土したが小破片が多く、図化できたものは少なかった。取り上げは方形墓ごとに区分しておこなったが、1・2号墓が接するところでは明確に区別ができなかったため、やむをえず1・2号墓出土遺物として報告する。

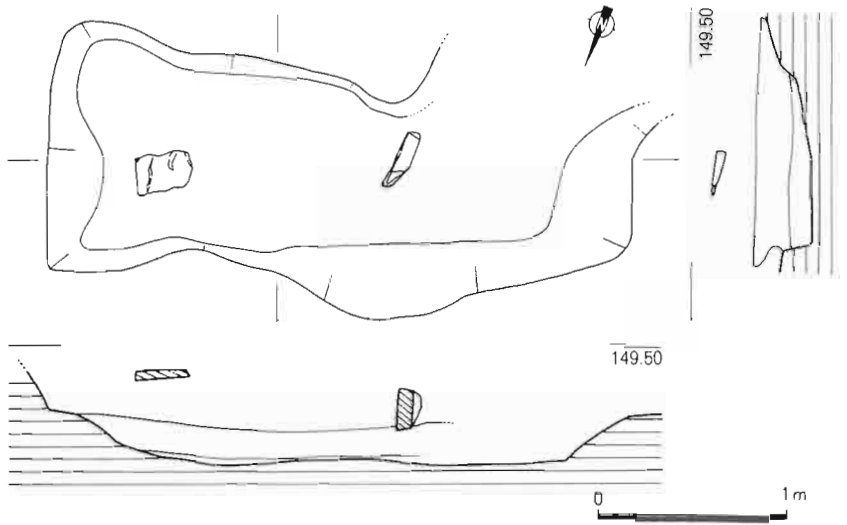
1～4・20は甕である。1～3はすべて頸部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、端部はやや内側にむけてつまみあげている。3は外面ハケ、内面は頸部よりやや下からヘラケズリを施しており、布留式の特徴をよく残す。4は1～3に比べ大型で、在地系の甕である。口縁部は端部付近を欠くが、やや内湾気味に立ち上がっている。胴部は中位に最大径をとり、内面にわずかにケズリの痕跡が残る。20は胴部の下半を欠損するが、ほぼ全体の器形がうかがえる。口縁部は内湾気味に立ち上がり、胴部は中位付近に最大径をとる。外面はタテ方向のハケ、内面は頸部よりやや下からヘラケズリが施される。内外面全体に厚く赤色顔料を塗布している。



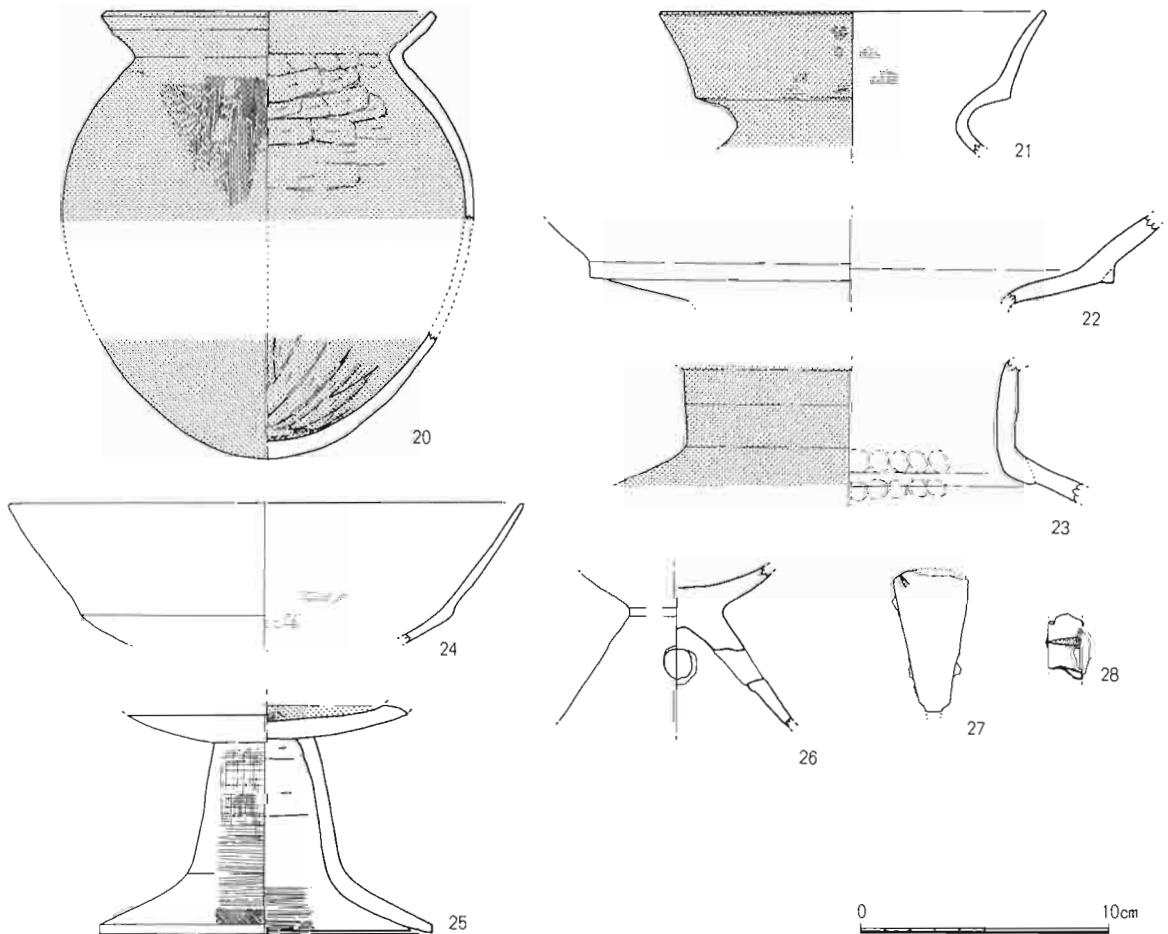
第8图 1·2号墓出土遗物实测图(1) (1/3)

5～7・21～23は二重口縁壺である。5は口縁端部と胴部を欠損する。口縁部は中位でわずかに平坦面を残すが、胴部からほとんど直線的に頸部までのびる。6は口縁部と底部を欠損する。胴部は全体に球形のプロポーションを呈する。7は口縁部を欠損するが、頸部以下はほぼ完全に残っている。頸部は胴部に直口し、ほぼ直線的に上方にのびる。胴部はやや肩が張る。底部には焼成後穿孔がみられる。5は外面頸部以下に、7は内面底部に、21・23は外面全体に赤色顔料を塗布している。

8～14・24・25は高坏である。

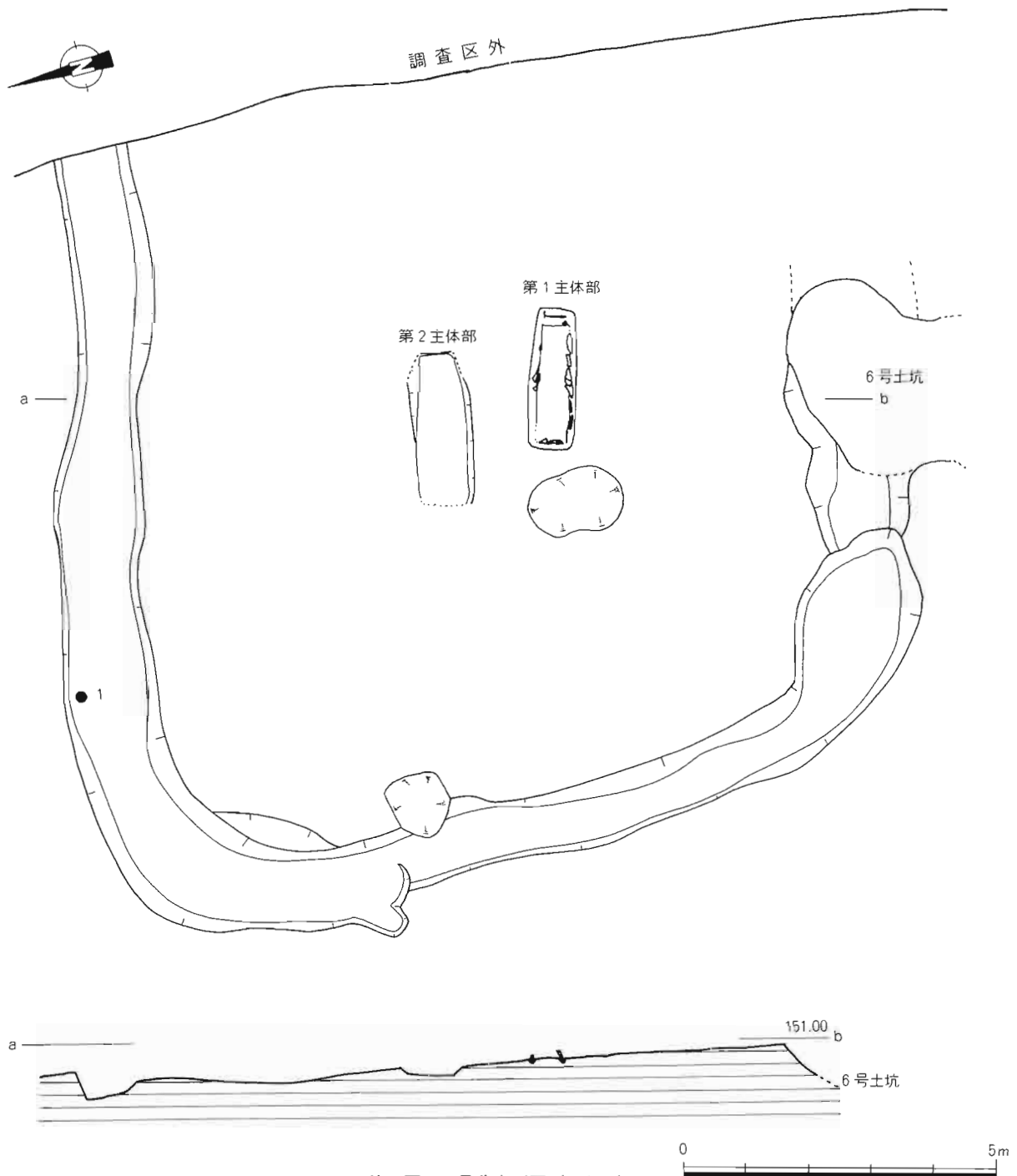


第9図 2号墓周溝内石棺墓実測図(1/40)



第10図 1・2号墓出土遺物実測図(2)(1/3)

11・12は口縁部片である。体部からほぼ直線的にのびる器形となろう。8・9・10も口縁部片であるが、11・12に比べ、体部から口縁部にかけての屈曲部に角度をつける。11・12の内面には赤色顔料が付着している。13は端部が擬口縁になっており、口縁部が欠損するほかはほぼ全体が残っている。脚部には穿孔が4ヶ所確認される。法量および胎土・色調などから12と同一個体である。13の坏底部に赤色顔料が認められないため、この個体は坏の口縁付近にのみ顔料が塗布されたものであろう。14も脚部で、4ヶ所穿孔がある。25は端部が擬口縁状になっているが口縁部を欠損する。坏部の内面には赤色顔料が塗布されている。脚部もやはり赤いがこれは赤色顔料ではなく化粧土の可能性が高い。この個体に関しては脚部内面と脚部外面屈曲部に10本/cm、脚部外面端部に11本/cmといった原体の異なるハケメを使用している。脚部がやや湾曲しながら緩やかに屈



第11図 3号墓実測図 (1/100)

曲して裾へ開く形態は、畿内系高坏の形態をよく残している。

15・16・26は器台である。15・26は小型の外来系器台で、胎土に金雲母を含むことから搬入品と考えられる。16は鼓形器台である。26は脚部4ヶ所に穿孔が行なわれている。

17・18は埴である。18は口縁端部がややとがり気味である。17は口縁端部が平坦で、底部を欠いているため脚付埴になる可能性がある。

19・27は鉄鏃である。ともに有茎鏃で、19は圭頭斧箭形式、27は鑿頭式である。

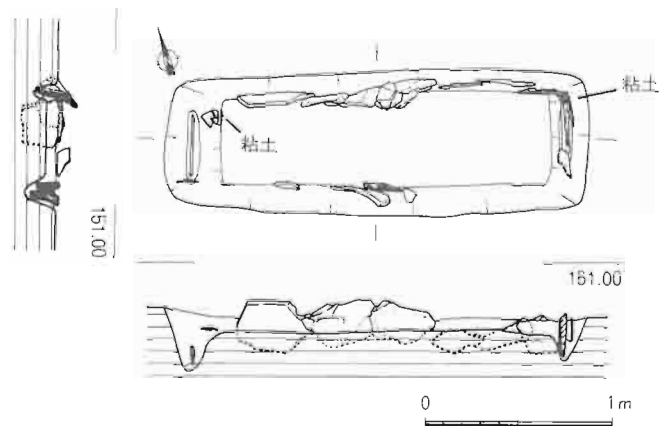
28は刀子の刀身である。

3号墓（第11図）

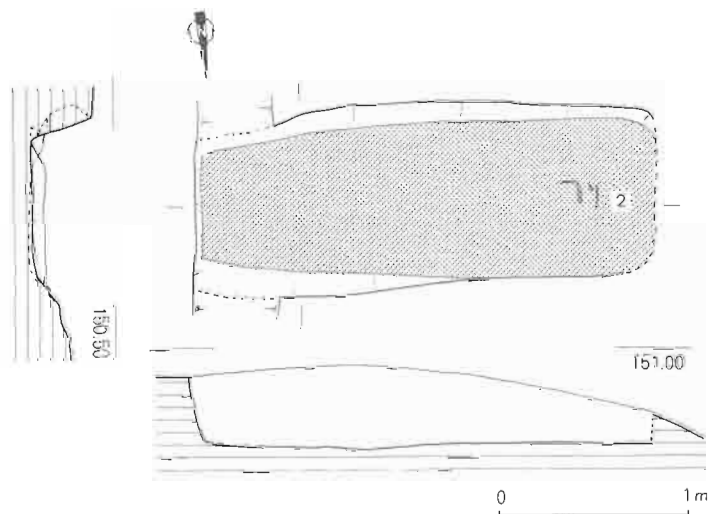
2号墓の南で検出された。周溝の南側は途中から削平されており、また東側は調査区外のため不明である。周溝は幅約1.5m、深さ約0.3mと浅い。主体部はかなり削平をうけているが、3号墓南方は1・2号墓よりも小高く見えるためトレンチを入れてみたところ、厚さ10cm前後の薄い盛土と思われる層が確認された。埋葬施設は東西方向を軸に2基検出され、1基は組合せ箱式石棺墓、もう1基は木棺墓である。しかし位置関係がわずかにずれているため、同時に造営されたものかどうかはわからない。

3号墓第1主体部（第12図）

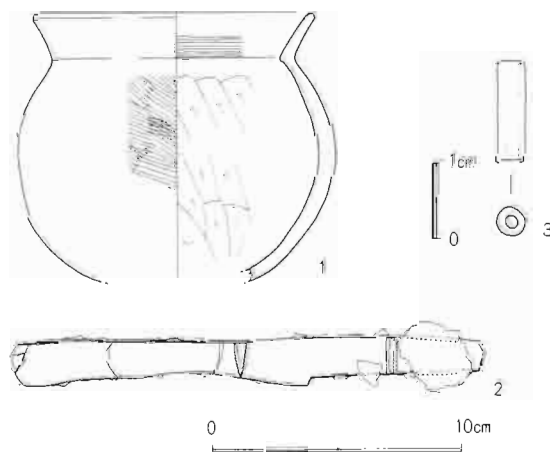
周溝で区画された内側のやや南寄りにあり、構造は安山岩の板石を多数使用した組合せ箱式石棺である。南側の側石は、検出時は石棺材がわずかしか残存していなかったが、抜取痕の検出によって全辺板石で囲っていたことがわかった。部分的に目張り用の粘土が残っている。遺物がなく、頭位も不明である。長辺2.3m、



第12図 3号墓第1主体部実測図（1/40）



第13図 3号墓第2主体部実測図（1/40）



第14図 3号墓出土遺物実測図（1・2は1/3、3は1/1）

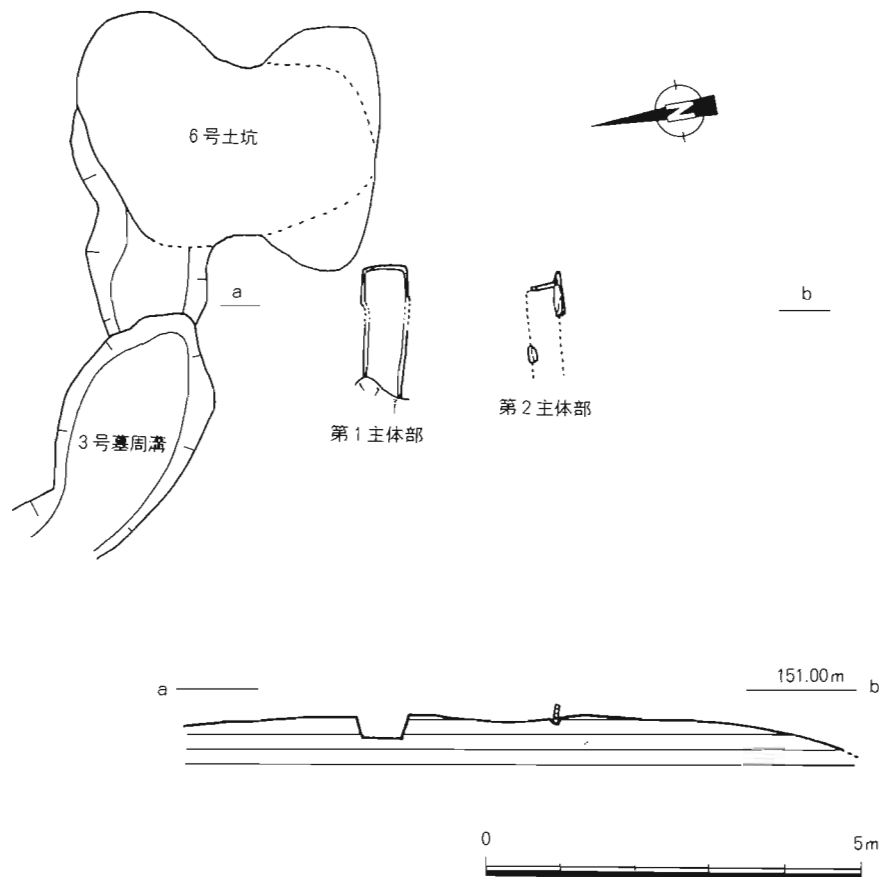
短辺0.8m、深さ0.2mを測る。

3号墓第2主体部（第13図）

第1主体部の北約1mにあり、長辺2.5m、短辺1.0m、深さ0.5mを測る。第1主体部の検出面と同一レベルで赤色顔料が確認された。遺構を掘り下げた結果、この埋葬施設が確認された。遺構のプランは西側を削平されているが長方形を呈すると推測される。遺構内からは石棺材等は検出されなかったことから、木棺墓の可能性が高い。また埋土中から検出された赤色顔料は西側で特に厚く、この中からは刀子（第14図-2）と鉈が出土したが、鉈は調査中に紛失したため詳細は不明である。草場第2遺跡72号土坑墓出土の鉈に酷似したものと記憶している。これらの鉄器はその出土位置から、棺内副葬であった可能性が高い。

3号墓出土遺物（第14図）

1は北側の周溝内から出土した甕である。底部を欠損するほかはほぼ完形である。口縁部は直線的にのび「く」の字に外反している。外面はハケ、内面は口縁部をヨコハケ、頸部より少し下がった位置よりタテ方向のヘラケズリが施される。2は第2主体部の赤色顔料中から出土した刀子である。先端と基部を欠損するほかはほぼ残っている。3は同じく第2主体部の赤色顔料中から出土した管玉で、直径0.25cm、長さ1.3cmである。色調は緑灰色で、材質は硬玉と思われる。



第15図 4号墓実測図 (1/100)

4号墓（第15図）

3号墓の南にある。主軸方向をほぼ同一とする主体部2基が確認され、主軸方向が3号墓と並行することや盛土の存在等から方形墓の範疇に加えた。周溝は確認されなかったが調査区の最も高い位置にあり、また近世の道状遺構などによってかなり削平を受けている状況から、後世に削平されたと考えられる（主体部の東も後世にかなり地形が変えられている）。遺構からの遺物の出土はない。

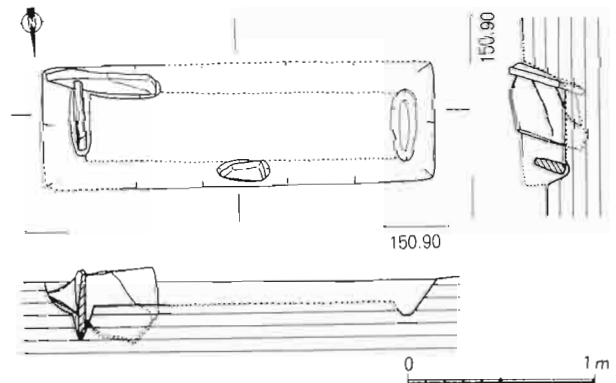
4号墓第1主体部（第16図）

2基並ぶ主体部のうち南側にあたる。構造は安山岩の厚めの板石を使用した組合せ箱式石棺である。石棺材は一部にしか残っていなかったが、両小口の掘り方が残っていることや、赤色顔料が残っていたため石棺自体の規模は推定できる。長辺2.1m、短辺0.65m、深さ0.13mを測る。

4号墓第2主体部（第17図）

3号墓でトレンチを入れ第2主体部を発見したため、4号墓についても第1主体部を中心に掘り下げた結果、この第2主体部が発見された。

第1主体部に並行して、第1主体部の北約1.5mにある。西側は植樹の際に破壊されている。長辺 $1.78 + \alpha$ m、短辺0.6m、深さ0.18mを測る。墓坑内からは石棺材や掘り方が確認されなかったことや、床面に赤色顔料が一面に散布されている状況に加え、角がしっかりしていることから、棺の構造は箱式木棺の直葬であろう。床面東側には赤色顔料の散布がおびただしい場所があり、ここが頭位と考えられる。



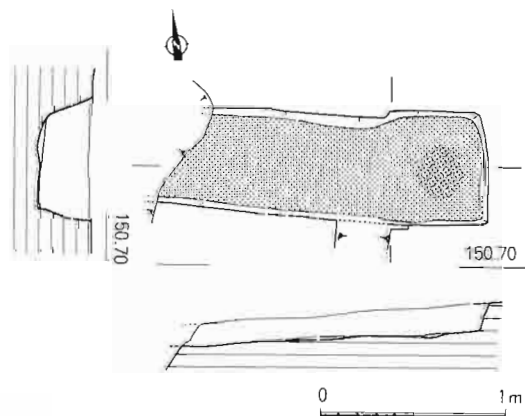
第16図 4号墓第1主体部実測図（1/40）

(2) 石棺墓（第18図）

本遺跡では方形墓の主体となる埋葬施設以外にも溝を伴わず単独で営まれた石棺墓・木棺墓・土坑墓が検出されている。順を追って説明する。

石棺墓は調査区ほぼ中央部の東端で検出された。墓坑面はほとんど削平を受けていたが、安山岩とみられる側石が立った状態で確認された。片側の小口と考えられる位置からも石棺材抜取痕が検出されたため、棺の規模の推定ができる。長辺1.97m、短辺0.4m、深さ $0.2 + \alpha$ mを測り、主軸を東西方向に向ける。

また、床面には赤色顔料が散布されている状態が確認された。墓坑内からの遺物は出土しなかった。



第17図 4号墓第2主体部実測図（1/40）

(3) 木棺墓 (第19図)

木棺墓は調査区のほぼ中央、2号墓と3号墓の間で検出された。表土を剥いだ時点で赤色顔料の広がりがみられ、掘り下げた結果、墓坑のプランが確認された。主軸を南北にとり、南側の一部は植樹の際に削平されている。長辺1.53m、短辺0.47m、深さ0.12mを測る。床面上には一面に赤色顔料が散布されているが、特に東側は顔料の散布がおびただしく、ここが頭位となろう。床面には棺材をはめ込んだと想定される掘り方が検出できなかったため、箱式木棺を埋葬していたことが推定される。墓坑内からの遺物の出土はなかった。

(4) 土坑墓

土坑墓は調査区の北、1号墓のそばで2基検出された。これらは1号墓周溝内木棺墓に続くように連っており、強い関連性をうかがわせる。

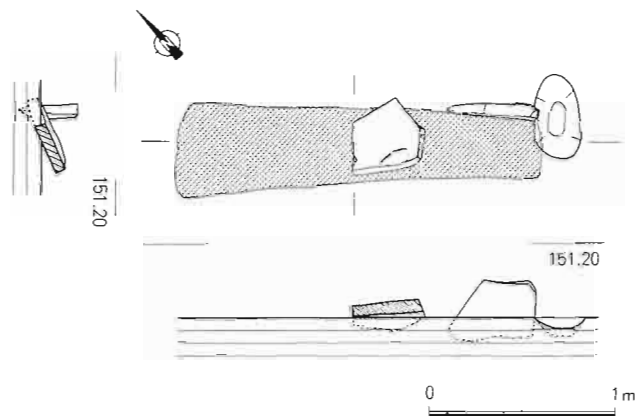
1号土坑墓 (第20図)

1号墓周溝内木棺墓の北西約1.2mの位置にある。検出プランは後世の削平をうけており不明確であったが、掘り下げた結果、プランが長方形となること

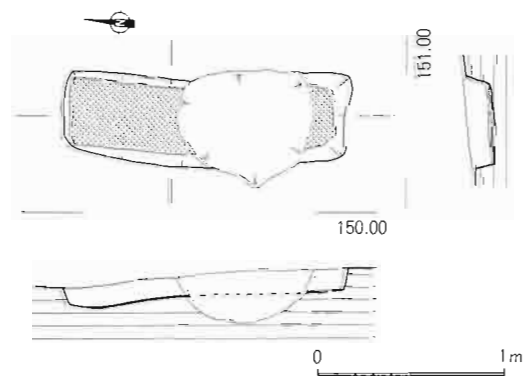
が確認された。主軸を南北方向に向け、長軸2.5m、短軸0.7m、深さ0.18mを測る。床面はほぼ平坦となっており、また床面上では棺材や棺の掘り方などは確認されなかった。赤色顔料の散布もみられないことから、素掘りの土坑墓と考えられる。主軸方向から考えて、1号墓や1号墓周溝内木棺墓と同時かその直後につくられたとみられる。墓坑内からは2点土師器が出土している。

1号土坑墓出土遺物 (第21図)

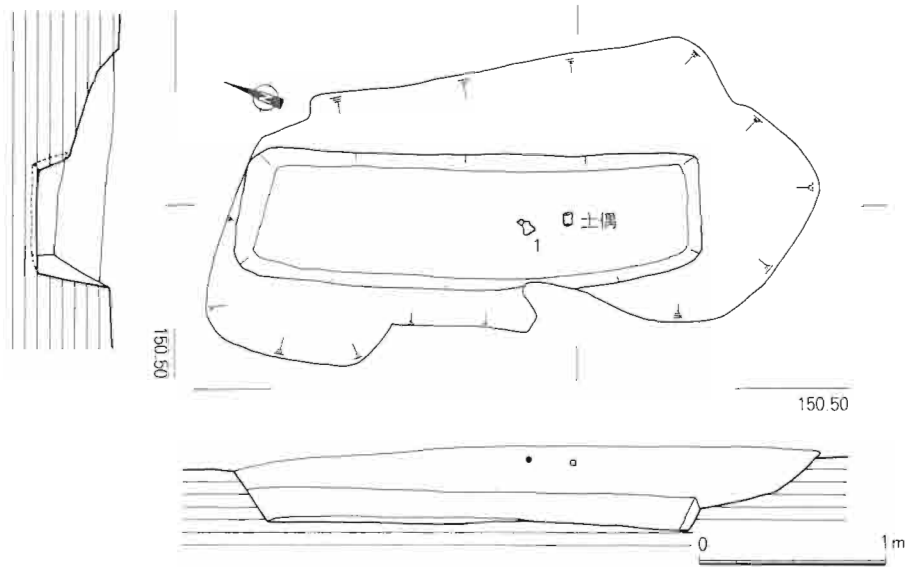
1は甕である。口縁部は中位がやや膨らみ、端部はわずかにつまみあげる特徴をもつ。外面は頸部直下にわずかにヨコハケの痕跡を残し、内面は頸部よりやや下からヨコ方向のヘラケズリが施される。外面頸部直下から体部にかけてと内面全体に赤色顔料を塗布している。2は壺である。口縁部と胴部を欠損する。内面にはヘラケズリを施す。



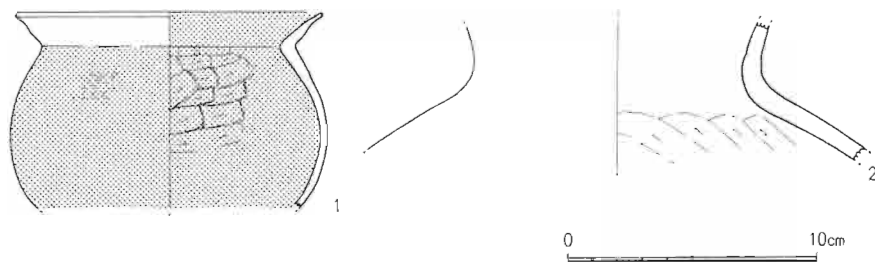
第18図 石棺墓実測図 (1/40)



第19図 木棺墓実測図 (1/40)



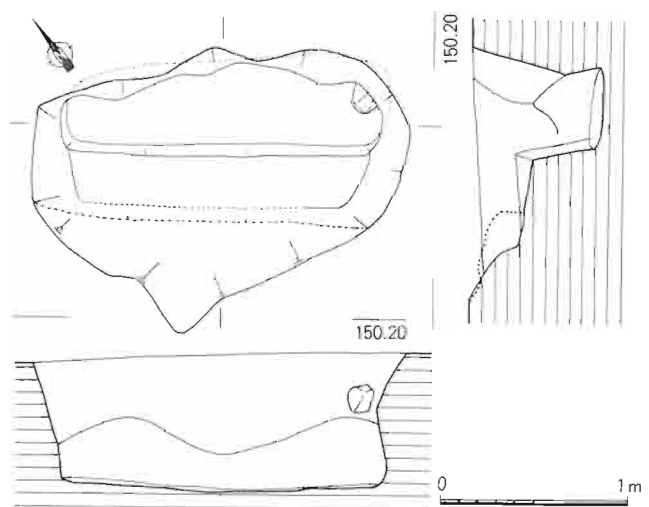
第20図 1号土坑墓実測図 (1/40)



第21図 1号土坑墓出土遺物実測図 (1/3)

2号土坑墓 (第22図)

1号土坑墓の北西約0.8mの位置にある。これも検出時は後世の削平を受けはっきりしなかったが、掘り下げた結果2段掘りの土坑墓となった。床面上には棺材等の掘り方は検出されず、また赤色顔料の散布もみられなかった。遺物が全く出土していないが、1号墓周溝内木棺墓・1号土坑墓と主軸方向が一致していることから、これらとほぼ同時期につくられたと考えられる。長辺2.0m、短辺0.87m、深さ0.7mを測る。



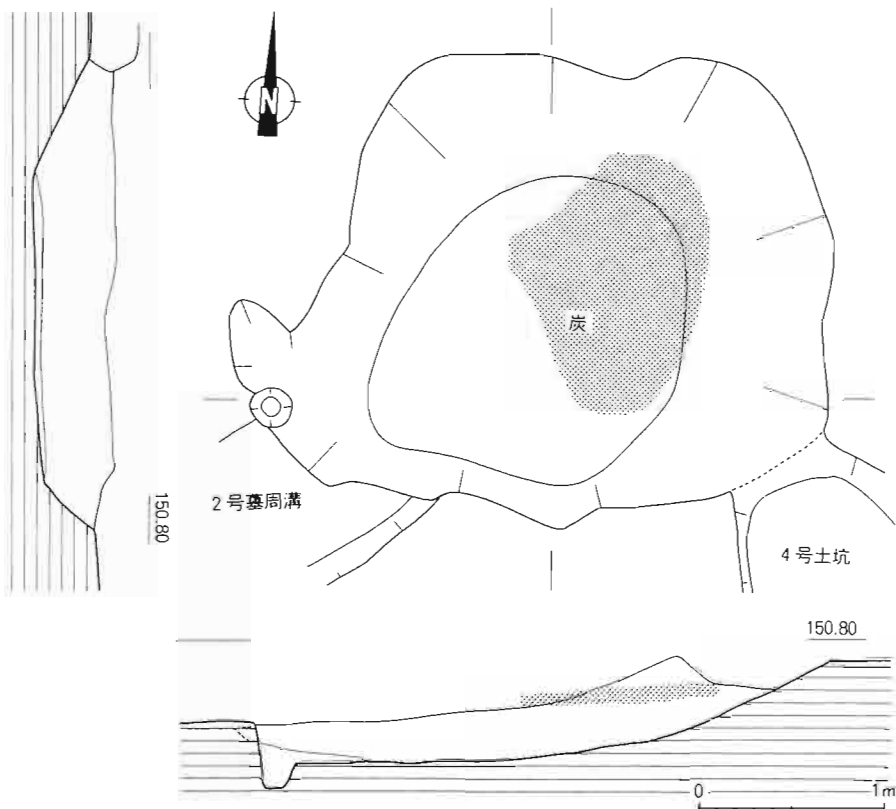
第22図 2号土坑墓実測図 (1/40)

(5) 土坑

土坑は10基確認された。ほとんどのものが不定形をなしている。

1号土坑（第23図）

2号墓周溝を切り4号土坑に切られる。2.55m×3.1mの不定形で、床面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。西側には小ピットがあるが、これは1号土坑に伴うものではないと思われる。遺物は流れ込みの状態で多数混入していたが、小破片のため図化は不可能であった。



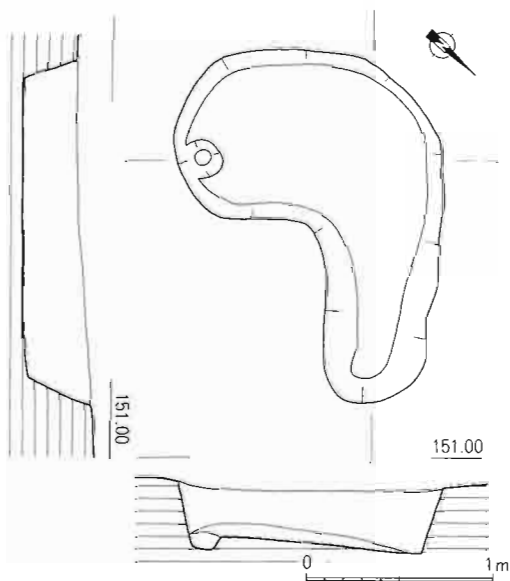
第23図 1号土坑実測図 (1/40)

2号土坑（第24図）

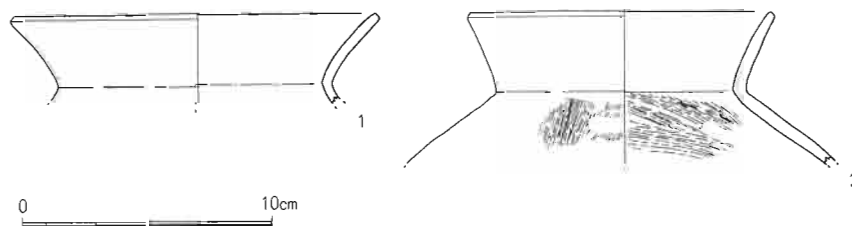
調査区の北寄りにあり、「L」字状をしたプランである。掘り方はかなりしっかりしており、床面は北方向にやや深くなっている。遺物は土坑の中央付近に床面から浮いた状態で検出された。

2号土坑出土遺物（第25図）

1は在地系の長胴甕である。口縁は「く」の字に屈曲し、肩は張らない。口縁端部はかなりシャープな稜をもつ。2は壺である。やや長めの口縁が外反して「く」の字状に立ち上がる。胴部は球形をなすと考えられる。内外面ともハケによる調整が施される。短頸壺になると考えられる。



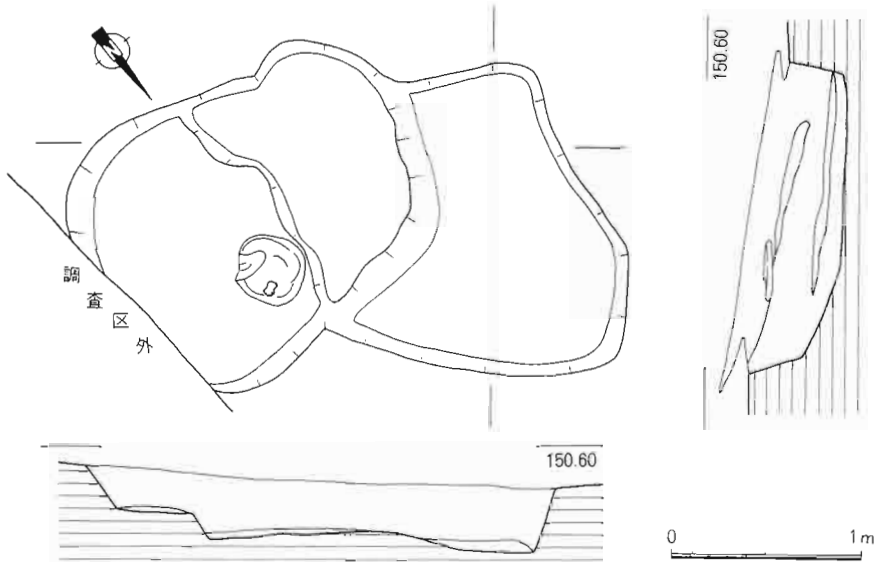
第24図 2号土坑実測図 (1/40)



第25図 2号土坑出土遺物実測図 (1/3)

3号土坑（第26図）

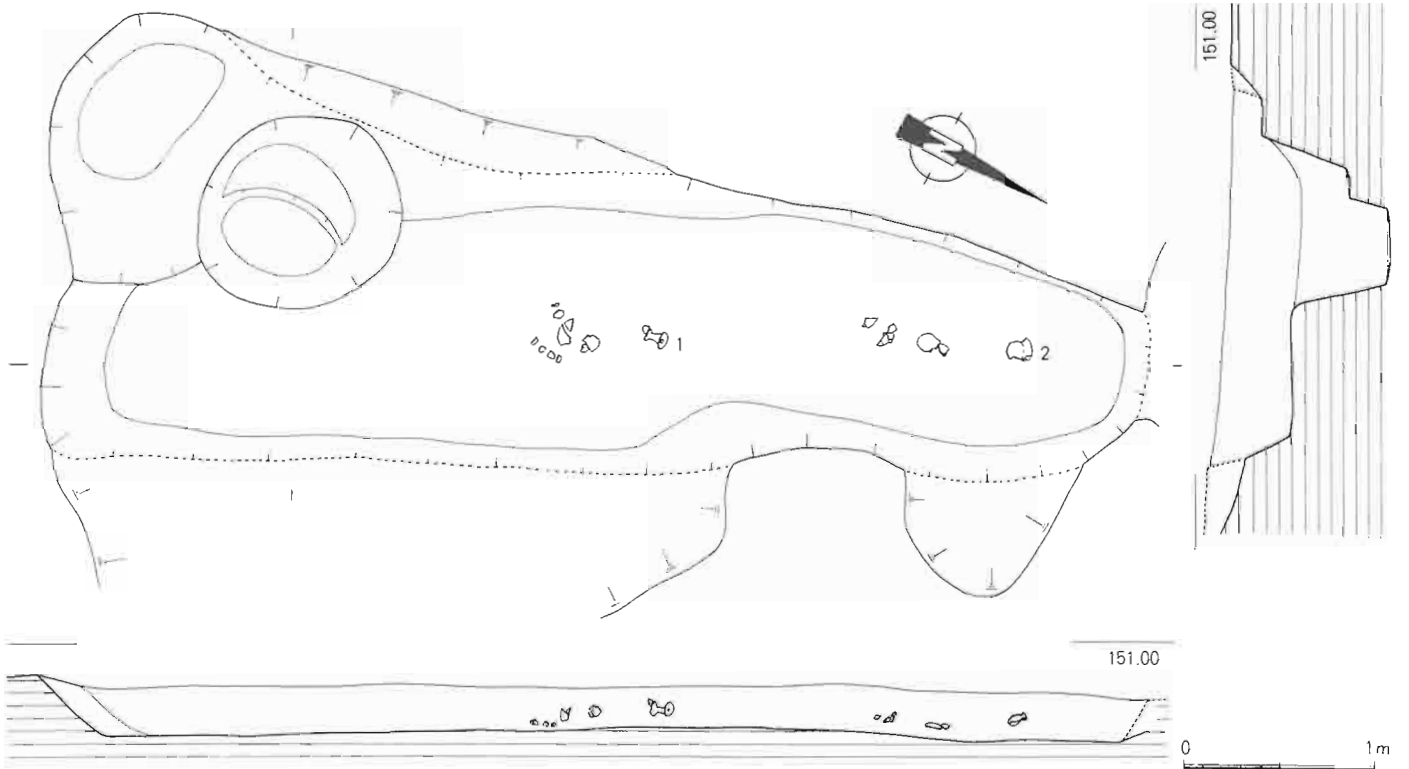
調査区北寄りの東端にあり、一部調査区外にかかる。プランは不定形で、床面は北西方向に向かって階段状に低くなっている。遺物の量は少なく、また小破片であったため図化は不可能である。



4号土坑（第27図）

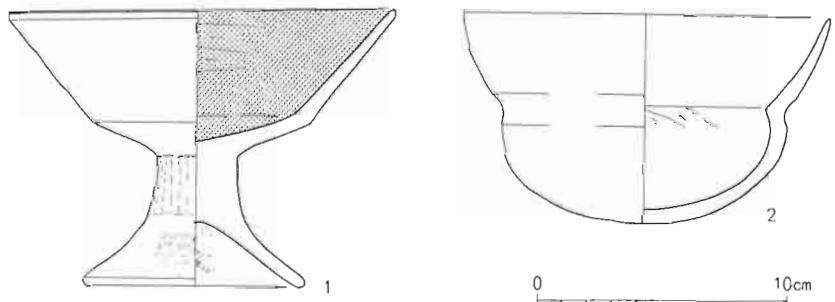
2号墓と3号墓の間にあ

第26図 3号土坑実測図（1/40）



第27図 4号土坑実測図（1/40）

り、1号土坑を切る。プランはほぼ長方形に近く、最大値で長辺5.82m、短辺1.94m、深さ0.27mを測る。床面はほぼ平坦となっている。南端に2ヶ所ピットが確認され、このうちひとつには炭化物が堆積した痕跡が確認されたが、これはこの土坑とは別のもの

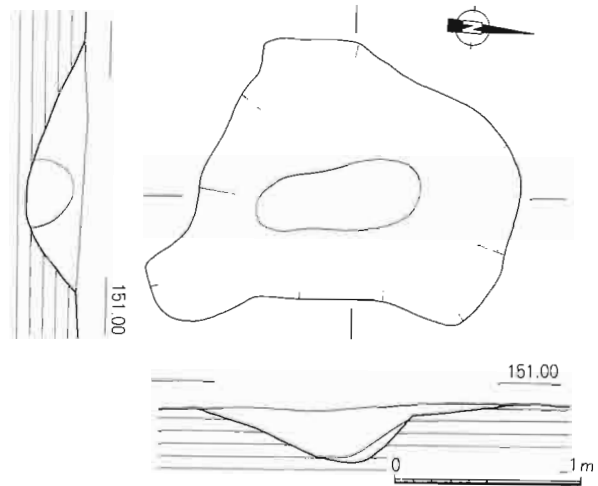


第28図 4号土坑出土遺物実測図（1/3）

であろう。土坑からはわずかに浮いた状態で遺物が出土した。

4号土坑出土遺物（第28図）

1は完形の高坏である。坏部は脚部に対して大きく、坏底は中央に向かって深くなっている。口縁部は直線的に開き、端部はやや尖り気味である。坏底と口縁の立ち上がりとの境に明瞭な稜を持つ。脚部は中実で、裾は高くゆるやかに開く。坏部内面に赤色顔料が塗布されている。2は小型丸底壺である。球体を少し押しつぶしたような体部と内湾して比較的長く伸びた口縁部を呈す。口縁端部は鋭く尖っている。最大径を口縁部にもつ。この形態のわりには器壁が厚い。



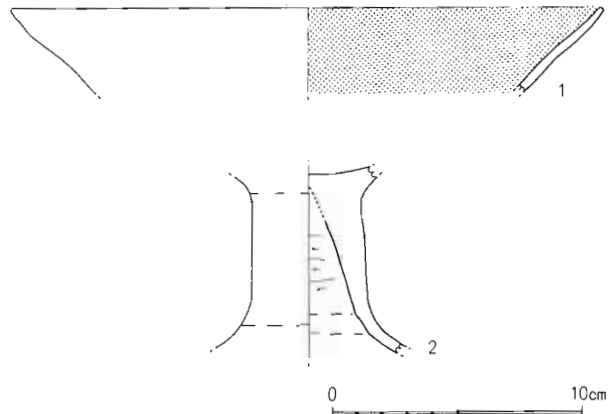
第29図 5号土坑実測図（1/40）

5号土坑（第29図）

4号土坑の東にある土坑で1.75m×1.39mの不定形をなす。浅い窪み状で床面は平らではない。埋土中より遺物が出土している。

5号土坑出土遺物（第30図）

1は高坏の坏部、2は脚部で、色調および胎土から同一個体と思われる。1は口縁部でかなり凹凸がめだち、器壁は薄く、端部にはシャープな稜がみられ、若干内湾気味にのびる。2は底端部を欠損するが、ゆるやかに裾へと広がると思われる。中空で内面にはヨコ方向のヘラケズリが施される。坏部内面には赤色顔料が塗布されているが、脚部には認められない。



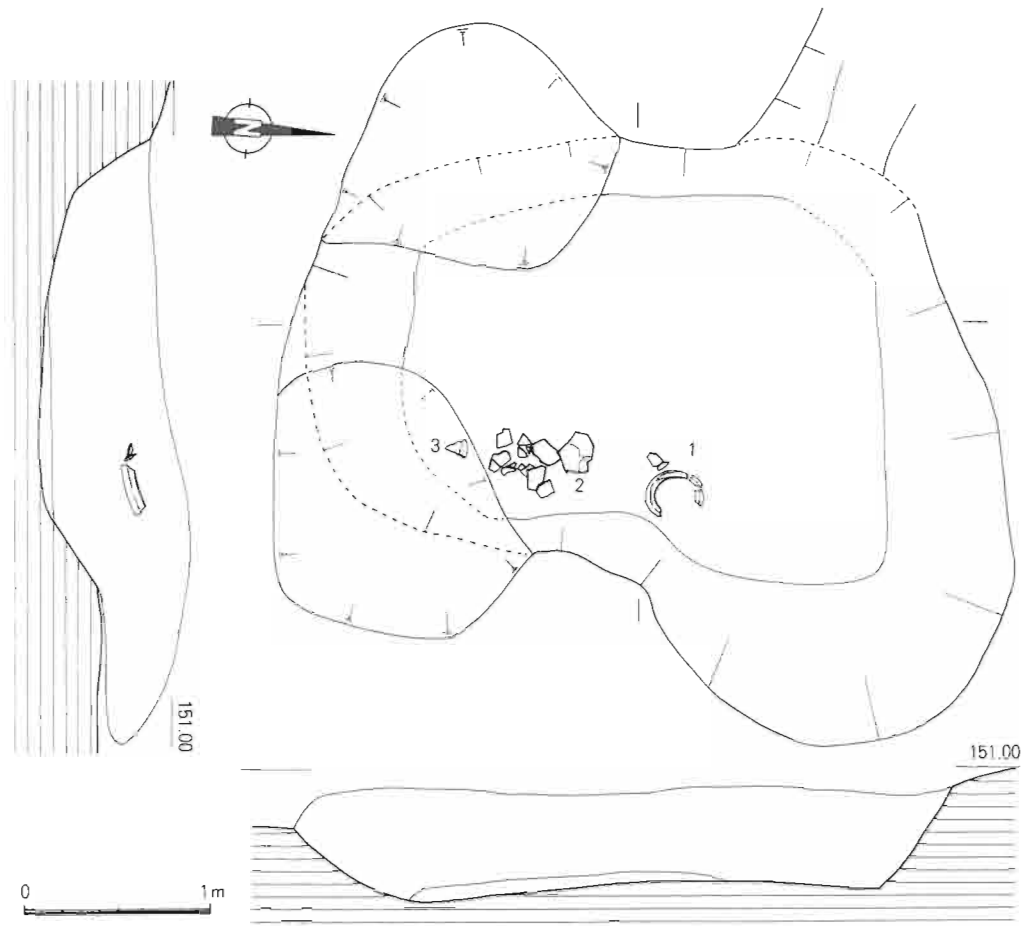
第30図 5号土坑出土遺物実測図（1/3）

6号土坑（第31図）

調査区中央部の東寄り、3号墓と4号墓の間にある土坑で、3号墓周溝と切り合う。先後関係については調査時に確認できなかったが、遺物の出土状況などを考慮すると周溝以前である可能性が高い。植林の際に遺構の南側をかなり削平されているが、それ以外の残りは比較的良好である。プランは不定形で、長辺3.43m、短辺3.2m、深さ0.61mを測る。床面はやや凹凸があり、壁面はゆるやかに立ち上がる。遺物は床から浮いた状態で検出された。

6号土坑出土遺物（第32図）

1は二重口縁壺の口縁部、2は底部であり、胎土・色調から同一個体と思われ、胴部肩から中位を欠損する。肩が張る形態で、胴部中位に最大径をとる。底部は厚く、レンズ底をなす。口縁部か

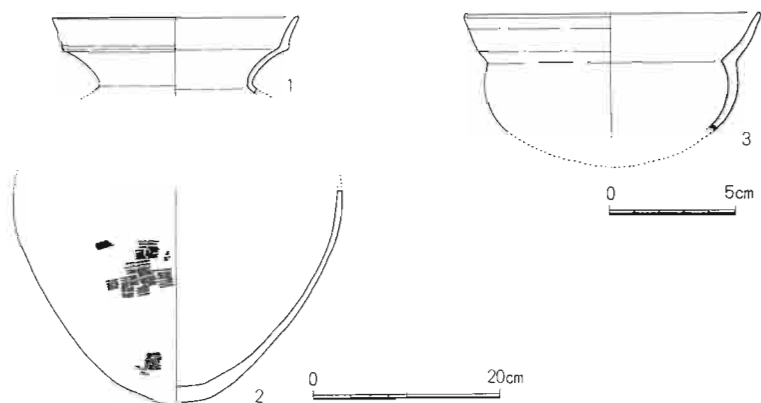


第31図 6号土坑実測図 (1/40)

ら頸部にかけては直線的に伸び、古い形態を残している。外面はタタキの痕跡を残す。本遺跡においては唯一の大型の土器で、壺棺の可能性もあったが、口縁部と体部が分離して出土したため壺棺とは認め難い。2は小型丸底壺で、器壁がかなり薄く、丁寧な作りである。体部に内湾した短めの口縁がとりつく。

7号土坑 (第33図)

調査区の北西端、近世の道状遺構のそばにある土坑で、プランは不定形である。長軸2.1m、短軸1.18m、深さ0.33mを測る。遺物は若干出土したが、図示することはできなかった。上層より近世の陶磁器も混じて出土したが、攪乱によるものと思われる。



第32図 6号土坑出土遺物実測図 (1・2は1/8、3は1/3)

第3表 土器観察表 (2)

単位: cm

挿図番号	遺物番号	法量 ①口径 ②器高 ③底径	種別	器種	調整 ①外面 ②内面	色調	胎土	赤色顔料	備考
7	1	①13.6 ②2.8+α	土師器	甕	①ヨコナデ 頸部はユビオサエ後ヨコナデ ②ヨコナデ 口縁部にヨコハケメが、体部にヘラケズリが残る	淡茶褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子		
8	1	①16.0 ②2.6+α	"	"	①②磨滅のため不明	淡褐色	角閃石、長石、石英、白色粒子、赤色粒子		
"	2	①14.2 ②2.1+α	"	"	①ヨコナデ ②ヨコナデ 体部はハケメか	淡茶褐色	角閃石、長石、白色粒子		
"	3	①13.4 ②8.0+α	"	"	①口部・頸部はヨコナデ、体部はハケメ ②口部・頸部はヨコナデ、体部は不定方向のヘラケズリ	褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		
"	4	②10.2+α	"	"	①磨滅のため不明 ②口縁部は不明、頸部以下はヘラケズリ	淡褐色	角閃石、長石、砂粒		
"	5	②5.8+α	"	二重口縁壺	①磨滅のため不明 ②口縁にハケメが残る	黄褐色	白色粒子、砂粒	○	
"	6	②22.4+α	"	"	磨滅のためわかりにくい ①縦方向のハケメ ②斜方向のハケメ	淡褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒	○	
"	7	②12.9+α	"	"	①磨滅のため不明 肩部はヨコナデか ②頸部直下までヨコナデか 体部は斜めのヘラケズリ、底部はユビオサエが残る	褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子	○	底部穿孔あり
"	8	①21.4 ②5.0+α	"	高 坏	①磨滅のため不明 ヨコナデか ②磨滅のため不明 ヨコナデか わずかにハケメが残る	淡褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		
"	9	①19.3 ②5.7+α	"	"	①ヨコナデ ②磨滅のため不明	茶褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		
"	10	①19.0 ②3.1+α	"	"	①②ともにヨコナデ	淡茶褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子		
"	11	①25.4 ②5.0+α	"	"	①磨滅のため不明 ナデか ②口縁部不明 坏部はハケメ	明黄褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒	◎	
"	12	①21.8 ②4.6+α	"	"	①磨滅のため不明 ナデか ②磨滅のため不明 ハケメが残る	淡褐色	白色粒子、砂粒	◎	13と同一個体
"	13	②8.4+α	"	"	①②ともに磨滅のため不明	"	角閃石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		12と同一個体
"	14	②5.9+α	"	"	①磨滅のため不明 ヘラミガキの可能性あり ②磨滅のため不明	淡褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		
"	15	①8.8 ②2.0+α	"	小型特殊器台	①②ともに磨滅のため不明	淡赤褐色	赤色粒子、金雲母		
"	16	②6.5+α ③17.0	"	鼓形器台	①磨滅のため不明 ②磨滅のため不明 口縁部にわずかにハケメが残る	淡褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		
"	17	①13.2 ②5.2	"	碗	①磨滅のため不明 ②磨滅のため不明 口縁部はヨコナデか	赤褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		
"	18	①11.5 ②3.4+α	"	"	①②ともに磨滅のため不明	淡褐色	角閃石、長石、石英、白色粒子、赤色粒子		
10	20	①13.4 ②17.8	"	甕	①口縁～頸部はヨコナデ 体部上半はハケメ、下半はナデ ②口縁～頸部はヨコナデ 体部上半は横方向のヘラケズリ 体部下半は斜方向のケズリで底部にはハケメが残る	褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒	◎	
"	21	①15.6 ②5.7+α	"	二重口縁壺	①口縁部はヨコハケメをナデ消す 頸部はナデか? ②口縁部はヨコハケメ、頸部は不明	明褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒	◎	
"	23	②3.5+α	"	"	①②ともにヨコナデ	"	角閃石、長石、石英、白色粒子、赤色粒子、砂粒		
"	22	②5.6+α	"	"	①頸部は回転ナデ、体部はハケメをナデ消す ②頸部はヨコナデ、頸部下部～体部はユビオサエ後ナデか?	淡褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子	◎	
"	24	①20.8 ②5.6+α	"	高 坏	①磨滅のため不明 ②磨滅のため不明 ヨコハケメがわずかに残る	淡茶褐色	角閃石、白色粒子、赤色粒子		
"	25	②9.1+α ③13.4	"	"	①坏部不明、ヘラケズリか 脚部中位まではタテハケメ後回転ナデ、屈曲部はヨコハケメ、端部は斜め方向のハケメ ②坏部不明、ハケメ後ナデか 脚部屈曲部までヘラケズリ後ナデ、端部はヨコハケメで後に沈線を1条入れる	淡赤褐色	角閃石、長石、白色粒子、砂粒	◎	
"	26	②6.9+α	"	小型特殊器台	①②ともに磨滅のため不明	"	長石、石英、白色粒子、砂粒、金雲母		
14	1	①11.2 ②10.6+α	"	甕	①口縁部ヨコナデ、体部は斜め方向のハケメ、下半は不明 ②口縁部ヨコナデ、口縁～頸部はヨコハケメ、体部は斜め方向のヘラケズリ	褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒	○	

挿図番号	遺物番号	法量 ①口径 ②器高 ③底径	種別	器種	調整 ①外面 ②内面	色調	胎土	赤色顔料	備考
21	1	① 12.4 ② 7.9+ α	土師器	甕	①ヨコハケメが残る ②口縁部はヨコナデ、頸部はユビオサエ、体部は横方向のヘラケズリ	黄褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒	◎	
"	2	② 5.6+ α	"	壺	①磨滅のため不明 ②口縁部は不明、体部はヘラケズリ	淡褐色	白色粒子、赤色粒子、砂粒		
25	1	① 14.8 ② 3.6+ α	"	長胴甕	①②ともに磨滅のため不明	"	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子		
"	2	① 12.4 ② 6.2+ α	"	短頸壺	①②ともに口縁部ヨコナデ、体部はハケメ	"	角閃石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		
27	1	① 15.6 ② 10.1 ③ 9.0	"	高 杯	①坏部不明、頸部はヘラケズリ、脚部はハケメをナデ消す ②坏部はヘラケズリをナデ消すか 底部はヘラケズリのちハケメをナデ消す	淡赤褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒	◎	
"	2	① 14.8 ② 8.3	"	小型丸底壺	①ヨコナデか ②口縁部はヨコナデか 頸部はナデ消すがヘラケズリが残る 坏部は不定方向のナデか	淡黄褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		
30	1	① 23.8 ② 3.5+ α	"	高 杯	磨滅のためわかりにくい ①②ともにヨコナデか	赤褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒	◎	2と同一個体
"	2	② 8.2+ α	"	"	①磨滅のため不明 ②磨滅のため不明 横方向のヘラケズリが残る	"	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		1と同一個体
32	1	① 26.6 ② 8.2+ α	"	二重口縁壺	①磨滅のため不明 口縁部はヨコナデ ②横方向のナデまたはハケメ	淡褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		2と同一個体
"	2	② 22.7+ α	"	"	①磨滅のため不明 タタキが部分的に残る ②磨滅のため不明 ナデか	"	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		1と同一個体
"	3	① 11.8 ② 4.7+ α	"	小型丸底壺	①②ともに磨滅のため不明	"	白色粒子、赤色粒子、砂粒		
37	1	① 12.5 ② 5.9+ α	"	二重口縁壺	①口縁部上半は不明、下半にハケメが残る ヨコハケメ後ナデか ②磨滅のため不明 ナデか	淡茶褐色	角閃石、長石、白色粒子	◎	
"	2	① 16.0 ② 5.8+ α	"	直口壺	①②ともに磨滅のため不明 ヨコナデか	赤褐色	角閃石、長石、白色粒子、赤色粒子、砂粒		

※赤色顔料：◎ははっきり認められる ○わずかに認められる

第4表 鉄器観察表

単位：cm

挿図番号	遺物番号	種別	現存長	現存幅	現存厚	備考
6	2	不明鉄器(馬具?)	10.2	0.7	0.6	1号墓周溝内木棺墓出土
8	19	鉄 鏃	11.1	3.9	0.3	1号墓周溝出土
10	27	鉄 鏃	5.6	3.0	0.3	2号墓周溝出土
"	28	刀 子	2.6	1.4	0.4	"
13	2	刀 子	18.9	1.9	0.5	3号墓第2主体部出土

IV 牧原千人塚の調査

牧原遺跡A地区の北東約10mにあるこの塚は、これまで千人塚古墳として周知されてきた塚である。Iで述べたように、この塚はこの地域では保存状態が良好な古墳であり、塚の周溝の一部が広域農道工事予定区域にかかるため県耕地課と協議を行い、この古墳を保存することを前提にその内容等の資料を得るため、確認調査をおこなった。

調査は、A区の調査と併行してまず墳丘の現状を測量し、その後周溝の範囲の確認と古墳の規模の推定を目的に、塚の周囲に4本のトレンチを設定した。

この塚は外観が半球状の土饅頭のように見えるが、測量の結果15m×14mの長方形プランを呈し、高さは約2mを測り、頂部は比較的平坦となっていることが確認された。墳丘はほぼ現状を保っているとみられ、傾斜が南面において最も緩やかであることを考えると、正面は南面であると思われる。またトレンチの調査では周溝は幅約5m、深さ約0.5mを測ることが明らかとなった。埋土の状況から判断すると、①周溝の土を盛ることによって墳丘を築造し、②その後盛土が若干崩壊して周溝内に堆積し、③長期間にわたって自然堆積が続き、④近世に至って耕地化するために周溝の外側をカットして溝を埋めならしていることがわかった。

周溝からは土師器片や砥石、鉄器などが出土したが、特に土師器片は小片で、図化できるものは少ない。

第38図の1・2は土師皿である。ともに底部しか出土していないが、1は底径9.6cm、2は8.2cm。どちらも磨滅が激しく、おそらく糸切り底であろうがはっきりと確認できない。2はかなり粗雑なつくりである。3は火鉢と思われる瓦質土器片である。体部破片のみで、法量は復元できなかった。4は砥石である。石材は安山岩系で、熱を少し受けておりもろくなって剥離した面がある。4面ともよく使われて凹面になっており、いちばん細くなる中央部付近で割れている。長さ5.1+ α cm、最大幅3.1cm。5は鉄剣の剣身部分である。両刃で中心にわずかながら鑄がある。身幅3.0cm。

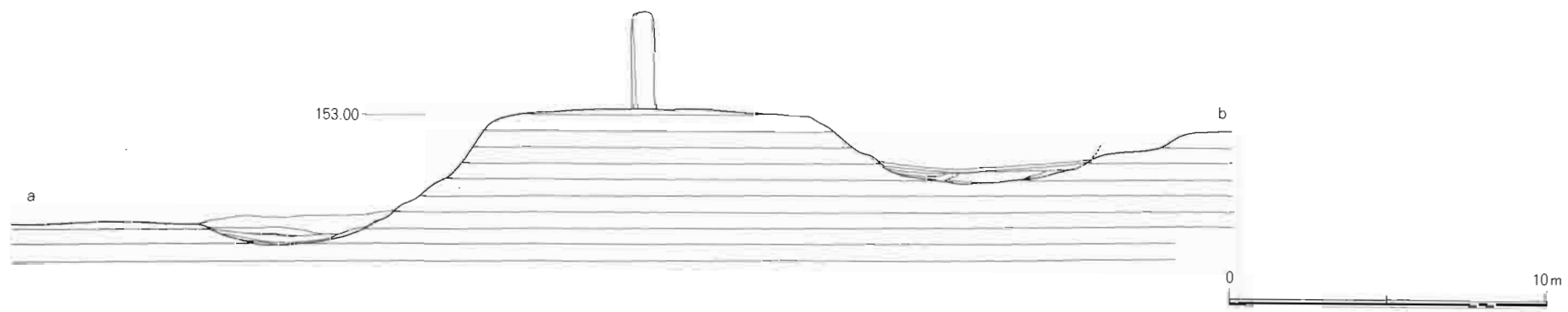
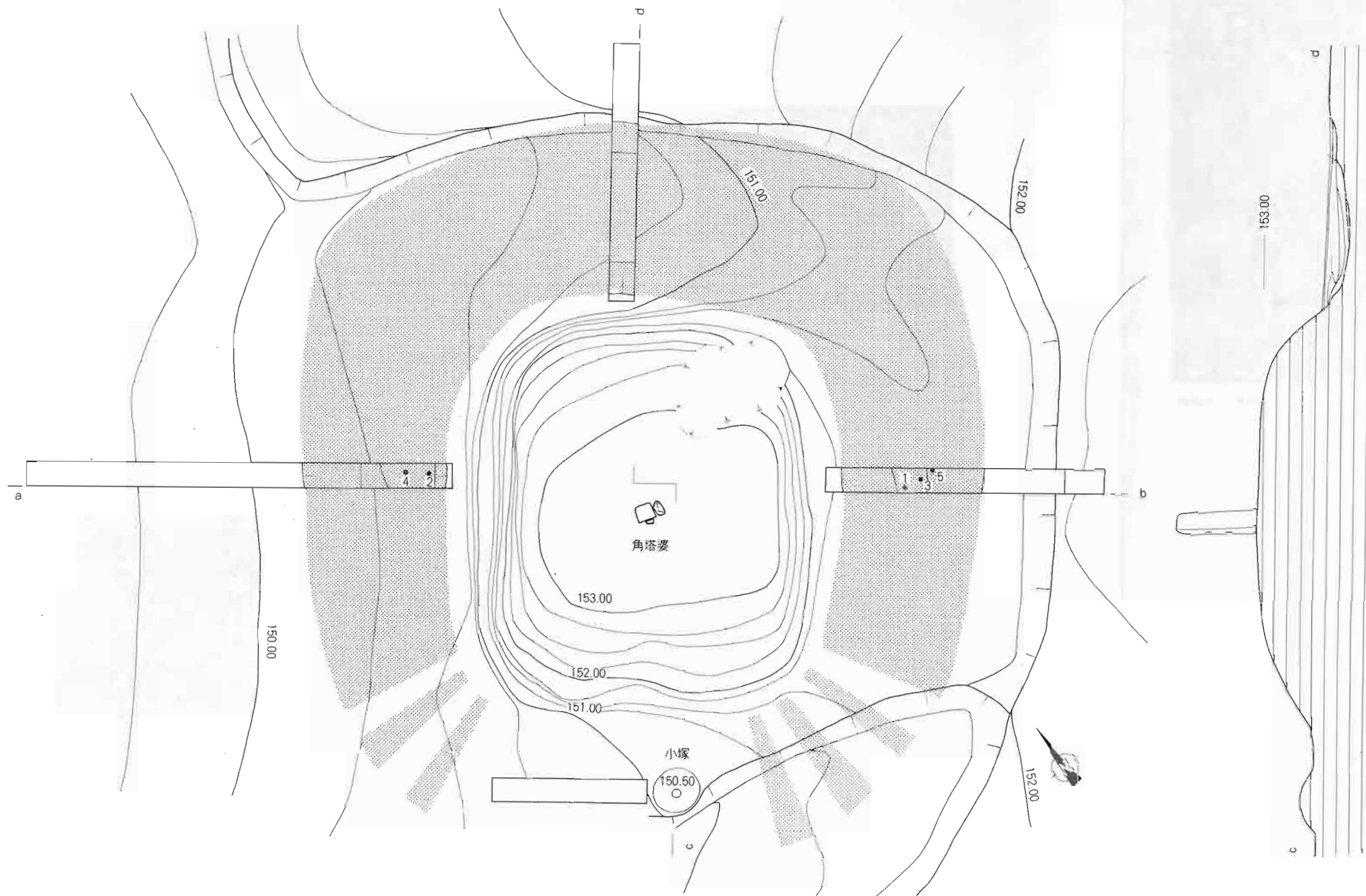
また、この塚の頂部中央には角塔婆が立てられ、塚の南側には小塚がみられる。角塔婆は一辺約0.8m、高さ約2.8mの角柱で、周囲4面にはそれぞれに梵字が一字ずつ刻まれている。(第39図参照)。小塚は直径約1.5m、高さ約0.5mである。

当初、古墳と考えられていたこの塚は、今回の確認調査により、中世の塚と考えられる。詳細については今後の調査に期待したいが、名称については調査結果を踏まえ「千人塚2号墳」改め「牧原千人塚」とする。

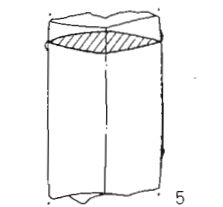
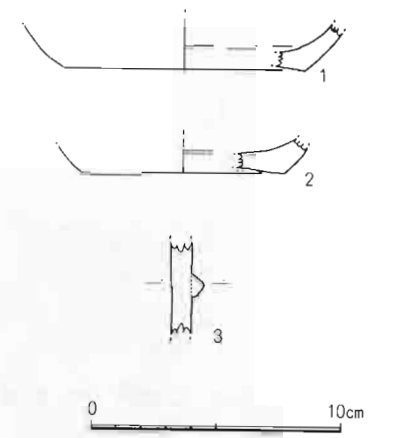
第5表 牧原千人塚トレンチ出土土器観察表

単位：cm

挿図番号	遺物番号	法量(①口径②器高③底径)	種別	器種	調整(①外面 ②内面)	色調	胎土
38	1	②1.9+ α ③9.6	土師器	皿	①②磨滅のため不明	淡褐色	赤色粒子 きめ細かな土
〃	2	②1.4+ α ③8.2	〃	〃	①回転ヨコナデ?②回転ナデ?杯底は糸切り?	〃	角閃石、長石、赤色粒子、砂粒
〃	3	—	瓦質土器	火鉢?	①突帯より上は不定方向のハケメ、下はヨコナデ ②5本/cmの粗い横ハケ	黄灰色	長石



牧原千人塚測量図 (1/200)



牧原千人塚トレンチ出土遺物 (1~3は1/3、4・5は1/2)



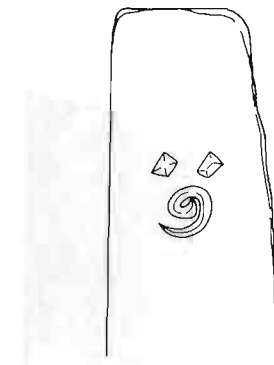
牧原千人塚全景



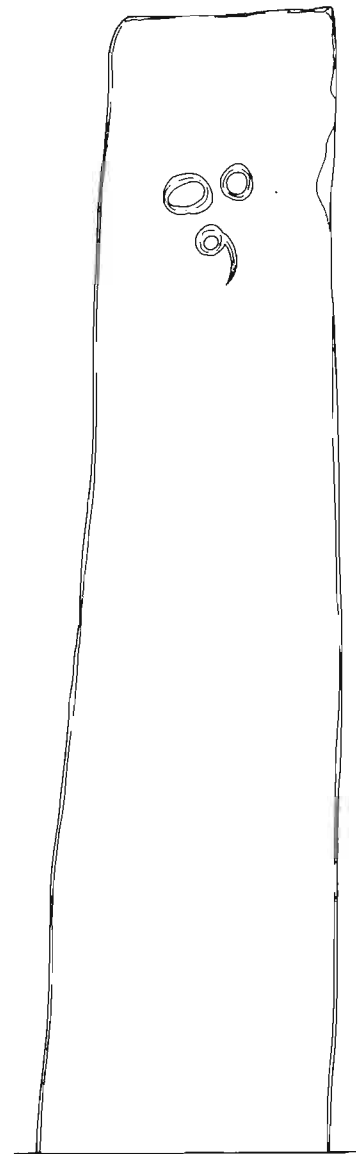
角塔婆 (南より)



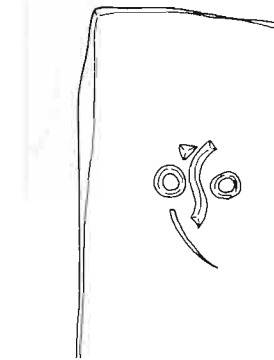
トレンチ内遺物出土状況



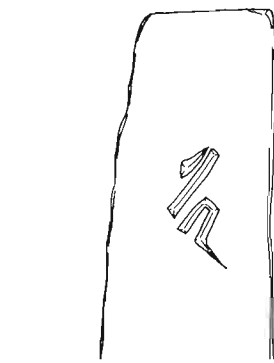
(東面)



(南面)



(北面)



(西面)



角塔婆 (1/20)

第39図 牧原千人塚 (2)

V 分 析 調 査

日田市牧原遺跡出土の赤色顔料について

本 田 光 子 (別府大学)

はじめに

日田市牧原遺跡 1・2号墓と9号土坑から出土した土器に認められる赤色、および2・3号墓主体部と調査区東側の石棺墓からの出土赤色物について、赤色の由来を知るために顕微鏡による観察および蛍光X線分析を行った。

出土赤色物は、現在までの知見によれば鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄 Fe_2O_3 を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀 HgS を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては四三酸化鉛 Pb_3O_4 を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

資料の一覧と分析結果および赤色顔料の種類を表に示す。

試 料

Na.1から3の土器片については、赤色物を針先に付く程度の量を検鏡用に採り、蛍光X線分析には各々そのまま測定した。Na.4から6については実体顕微鏡下でできる限り調整（混入土砂、夾雑物の除去）し、赤色物を針先に付く程度の量を採り検鏡用に、残りを研和して蛍光X線分析に供した。

顕微鏡観察

検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類、二種類以上の赤色顔料があれば混和の状態と相対量、夾雑物の有無等を観察するものである。今回の試料にはベンガラのみを認めた。ベンガラ粒子は、塊状、棒状、板（扁平）状、球状、不定形等様々な外観をもち一様でない。出土ベンガラには透明な管状（パイプ）粒子を含む例があるが、本試料のベンガラにはいわゆるパイプ状粒子は含まれていなかった。Na.3については、赤色顔料を認めることができなかった。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。

掘場製作所製 MESA-500を用い、15kv-440 μ A;50秒、50kv-20 μ A;50秒、大気、の条件で行った。

赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀・硫黄、ベンガラであれば鉄・酸素であるので、水銀と鉄の有無のみ表中に記した。他にマンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、それらはみな主として混入の土砂部分に由来すると考えられるので表中では省略した。但し、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。なお、鉛丹の主成分である鉛は検出されなかった。

結 果

顕微鏡観察と蛍光X線上記の分析結果とそれにより推定される赤色顔料の種類は下記のとおりである。

検鏡でベンガラ、蛍光X線分析で鉄が検出され、水銀が検出されなかったものをベンガラとした。

表 試料一覧と分析結果および赤色顔料の種類

No.	試料	蛍光X線分析		顕微鏡観察		赤色顔料の種類
		鉄	水銀	ベンガラ	朱	
1	1号墓周溝 高坏 (第8図-11)	+	-	+	-	ベンガラ
2	2号墓周溝 高坏 (第10図-20)	+	-	+	-	ベンガラ
3	9号土坑 二重口縁壺 (第37図-1)	+	-	-	-	?
4	2号墓 主体部	+	-	+	-	ベンガラ
5	3号墓 第2主体部 (木棺墓)	+	-	+	-	ベンガラ
6	石棺墓	+	-	+	-	ベンガラ

考 察

出土土器に赤色顔料が付着残存している場合、その赤色の由来としては三つのことが考えられる。第1は装飾を目的にした赤色塗彩、第2は赤色物の貯蔵・保管のための容器あるいは甕棺墓等で遺骸に施された赤色顔料が二次的に付着した物、第3はいわゆる内面朱付着土器である。現在までの知見によれば三種の出土土器に付着残存する赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄 Fe_2O_3 を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀 HgS を主成分とする朱の2種が用いられている。第1の装飾と、第2の貯蔵あるいは付着についてはベンガラと朱の両者が認められ、第3の場合は朱である。No.1は装飾のためのいわゆる丹塗りと思われ、No.2は甕内に赤色顔料が入っていたために付着した状態のように見受けられる。

墳墓出土赤色顔料の種類と使われ方は現在のところ、次の3類にまとめることができる。

- a類：床面から朱だけが出土するもので、埋葬施設の床面あるいは遺骸から朱だけが検出され、朱は遺骸自身に施されていたものと推定される。
- b類：朱とベンガラの両方が出土するもので、埋葬施設の内面にベンガラを塗布し、床面にもベンガラを塗布あるいは散布した状態に、a類の遺骸を納めたものと推定される。
- c類：ベンガラだけが出土するもので、埋葬施設内面にベンガラだけを塗布したものあるいは床面からベンガラだけが出土するものである。

上記のうちa類は北部九州地方で弥生時代の当初よりみられ、特に大形甕棺墓で多用されるが、甕棺墓の衰退に伴い極端に減少する。一方、分析例は多くはないが、弥生時代中期末から後期初頭の近畿・山陽・山陰・北陸地方では、それまで墓から出土することがなかった赤色顔料が、主としてa類の形で認められるようになる。b類は北部九州地方の後期中頃以降に始まり、弥生時代終末まで同地域内で盛行する。c類は北部九州地方で弥生時代の当初よりみられるが、例は多くない。c類が恒常的に認められるようになるのはb類と同時期であり、b類同様に弥生時代終末までは同地域内で盛行する。b・c類は古墳時代には一般的な風習として全国で行われている。

本例はc類であり、北部九州地方での一般的状況ともいえるが、b類が認められないこと等、今後この地域での墳墓出土赤色顔料の在り方について調査する中でさらに検討を続けたい。

今回、調査の機会をいただきました日田市教育委員会および同松下桂子氏に感謝致します。

VI ま と め

1. 土偶について

今回の調査によって発見された遺物の中でも特に注目されるのは土偶の出土である。土偶は県内では宇佐地域と大野川流域を中心として貝塚や集落などから出土しているが、市内ではこれまでに盆地南西部の隈山遺跡（表採）と北部の三和教田遺跡の2遺跡で出土している。

隈山遺跡出土の土偶は腹部破片で、長さ約3 cm、幅約4 cm、厚さ約3 cmを測る。同時に縄文時代後期末の御領式土器が採集されていることから、これらの土器と共伴していた可能性がある。^(註¹)

三和教田遺跡出土の土偶は縄文時代後・晩期の土器を伴う自然流路から3点が出土している。そのうち1点は頭部と四肢を欠く胴部で、色調は黒褐色を呈し、全体に丁寧なミガキが施されている。前面には粘土を貼り付けた乳房が、背面には肩紐状に沈線が施され、赤色顔料が塗布されている。^(註²)

今回牧原遺跡で出土した土偶は左足部分の1点のみであるが、後期の土偶の特徴である写実的な造形と、共伴こそしていないもののほかの遺構より縄文時代後期の浅鉢が出土していること、さらにこれまでの市内出土の土偶はいずれも後期末～晩期にかけてのものであることから、この土偶は縄文時代後期～晩期、おそらく御領式の時期のものと考えられる。

今回の調査区は丘陵最高所よりやや下った位置にあるため当該時期の遺構がこの調査区外に存在した可能性がある。牧原遺跡の周辺には西に下った谷部に大部遺跡があり、大山川を挟んで対岸の手崎遺跡では縄文時代の住居跡が発見されており、^(註³)それらの遺跡との関連性が注目される。

2. 古墳時代の遺構について

1号墓・2号墓の周溝などからは、土師器がまとまって出土した。以下、これらの遺物から遺構の時期を検討し、遺物の変遷について考えてみる。

1号墓周溝から出土した土師器は甕・二重口縁壺・高坏・器台等の器種構成がみられた。甕はいずれも「く」の字に外反した口縁部の端部を内側につまみあげ、胴部は下半ははっきりしないが全体的には球形のプロポーションでやや肩が張る器形となる。外面はハケ、内面は頸部より少し下がった位置からヘラケズリが施される。二重口縁壺は頸部から口縁部にかけてはほぼ直線的に開く。高坏は坏体部から口縁部にかけて直線的にのびるもの（第8図-10・11・12）と、いったん稜をもちそこから口縁部にかけて外反しながら長くのびるもの（第8図-8・9）の2種がある。これらは古墳時代前期の特徴をもつもので、柳田編年のⅡa～Ⅱb期、井上編年の古墳前期1式に該当し、^(註⁴)布留式古段階に相当する。

次に2号墓の遺物についてであるが、甕は口縁部をやや内湾させ、球形の胴部は最大径を中位にとる。底部は丸底であるが先端部はわずかにすぼまり、いくぶん古式の特徴を残す。二重口縁壺は擬口縁から上部へ外反しながらのびる。高坏は1号墓の8・9と類似するが、坏体部の稜から口縁部にかけては少し内湾気味にのびる。これらの特徴は1号墓に比べいずれも後出的要素を含むものであり、^(註⁵)柳田編年のⅡb期、井上編年の古墳前期2式に相当する。

3号墓からは甕が出土しているが、口縁部は「く」の字となり頸部から口縁端部にかけてはほぼ直線的にのびる。外面はハケ、内面は頸部からわずかに下った位置からヘラケズリが施され、底部は欠損しているものの丸底と考えられる。この土器は在地における布留式土器の変容甕とみられ、布留式土器の古段階の特徴をまねてつくったと思われる。したがって時期は1号墓とほぼ同時期と考えられる。

4号墓からは遺物の出土はないが、ほぼ3号墓の主体部と主軸の方向が一致しており、距離的にも3号墓の南側の周溝を挟んでおおよそ等距離にあることから3号墓と同一時期につくられたと推測される。したがって、方形墓は若干の時期差はあろうが、1・3・4号墓が最初につくられ、後に2号墓がつくられたと考えることができる。

このほかの遺構については、1号墓周溝内木棺墓から1・2号土坑墓は少し方向を変えながらも全体的には直線的に並び、2号墓を挟んでその延長線上に木棺墓や石棺墓が存在する。したがってこれら外部の墓は1・2号墓を深く意識してつくられたと考えられ、1号墓から2号墓が造られた間にかけて同時に造営されたとみることができる。このことは1号土坑墓の遺物が1号墓周溝出土の甕とほぼ同様の特徴をもつことから首肯される。

また周辺の土坑群からもそれぞれ少量ながら土師器が出土している。中でも4号土坑からは小型丸底壺が出土しており、1号墓とほぼ同時期の可能性を示している。5号土坑の高坏や9号土坑の山陰系二重口縁壺も同様であろう。したがって、これらの土坑については墓地と何らかの関わりがなかで意図的に掘られたものと考えられる。また、2号土坑については在地系の長胴甕や小迫辻原遺跡1号居館の壺とほぼ同様の特徴をもつ壺を伴い、6号土坑は4号土坑例と比較して古式の特徴をもつ小型丸底壺を伴っている。このことから、2・6号土坑は布留式最古段階の遺構とみることができる。

以上の結果から、2・6号土坑が先行してつくられたのち、今回の調査区で確認された1～4号墓のような方形墓が本格的に造営されたと考えられる。調査区が道路部分のため全体像は把握できないが、2・6号土坑が他の土坑と同様、墓に関連してつくられたと仮定すれば、1号墓以前の墓地が調査区外（特に北から東側の高い部分）にかけて広がっていると考えることができよう。

方形墓としては、市内では草場第二遺跡・徳瀬遺跡で調査されている。徳瀬遺跡はまだ整理途中で詳細は本報告に譲るが、古くても2号墓と併行の時期と考えられる^(註7)。また草場第二遺跡では14基の方形墓が調査されているが、遺物は4世紀後半（布留式新段階）のものであり^(註8)、牧原遺跡の方形墓はそれらに先行するものである。先の2者が主体部をいずれも石棺のみによって構築している事実を考えると、石棺墓を併用することは牧原遺跡の特徴なのか、時期的なものなのか、今後の課題となろう。

3. 牧原千人塚について

牧原千人塚の調査から ①一辺15m×14m、高さ約2mの墳丘をもつ長方形プランを呈する ②幅約5mの周溝が巡る ③塚の頂部中央に角塔婆がたっている ④塚の南に直径1.5mの小塚があるといった特徴が見出された。なかでも③はこの塚を位置づけるうえで重要な意味をもつと考えられる。

この塚の時期について周溝から出土した遺物によって推測すると、土師質土器の坏の底径が9cm前後で底部が厚く、糸切り底で、口縁部のたちあがりやや内湾気味であることから、慈眼山遺跡（A地区）における坏B1類に相当すると考えられ、16世紀までは下らない^(註9)。また同時に瓦質土器が出土しているので15世紀以前である可能性は低い。以上のことから考えて、15世紀代に築造されたと推測される。

またこの塚の付近一帯には「牧原古戦場」という伝承が残っている^(註10)。通称千人塚といわれてきたのはそのためであろう。

今回の調査によってこの塚が中世期のものであることが確認され、角塔婆を伴っていることを考慮すると、この千人塚が墓または供養塔であった可能性は大きい。しかし調査はトレンチによる周溝の調査にとどまっており、塚と角塔婆の同時性など不明な点が多く、今後の課題となろう。

4. 近世の道状遺構について（第40図）

今回の調査区（A区）では道状遺構（小国街道）が縦断していたことから、その構築時期や規模等を確認するためにトレンチを設定した。

この道状遺構は現状では切通し状となっており、幅は約4m前後、深さは最大で5m前後（調査区外の場所も含めて）を測る。トレンチ内からは若干近世以降の遺物が出土したが、中世以前のものはなく、したがってこの道状遺構が近世に構築された遺構であることが確認された。

「小国街道」は竹田の岡城と日田の永山布政所を結ぶ道の一部で、日田に向かう近世街道はすべて日田往還と呼ばれていた。

岡城と永山布政所を結ぶ道は大まかには竹田岡城－久住－肥後小国－天瀬（五馬）－牧原－日田永山布政所というルートを通る。牧原付近に限ってみると、五馬から現在の県道岩戸五馬日田線を通り、日田市・天瀬町境で牧原の山道に入る。そしてA区を通り、自動車学校の東側を玖珠川に向かって降りていく。玖珠川畔には現在4～5軒ほどの集落があり、この集落内の道は今ほとんどがアスファルトで舗装されているが、わずかに当時の石畳が残存している。地元の人の話によれば、石畳の上をそのままアスファルトで覆ったということなので、この集落に至る道筋には本来かなり石畳が残っていたのであろう。また集落の川岸は渡舟場があったといわれ、ここから対岸の上井手に渡っていたと考えられる。この玖珠川越えについては、舟を使用せずに少々遠回りをして小ヶ瀬から橋または河原石を渡り山道に行く別道もあったことが確認されている。このようにして玖珠川右岸に渡った後は日高町の集落、現在の国道210号線、竹田若宮八幡社の前、隈町を通り、咸宜園の前を横切って永山布政所に至ったと考えられる。

（注1）穴井通照『旧石器・縄文時代』『日田市史』 日田市 1990

（注2）吉田博嗣『三和教田遺跡C地点』大分県文化財調査報告第98輯 大分県教育委員会 1997

（注3）田中裕介『手崎遺跡 大部遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ 大分県教育委員会 1992

田中裕介・高昌豊『上野第1遺跡（平原地区・米田地区） 上野第2遺跡 手崎遺跡（2・3次）』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ 大分県教育委員会 1994

（注4）柳田康雄『土師器の編年 九州』『古墳時代の研究』6 雫山閣 1991

井上裕弘『北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景』『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念論集 児島隆人先生喜寿記念事業会 1991

（注5）注4と同じ

（注6）渋谷忠章・小柳和宏ほか『九州横断自動車道（日田地区）建設に伴う発掘調査概報Ⅴ—小迫辻原遺跡・小迫墳墓群—』大分県教育委員会・日本道路公団 1988

（注7）平成5年度日田市教育委員会調査

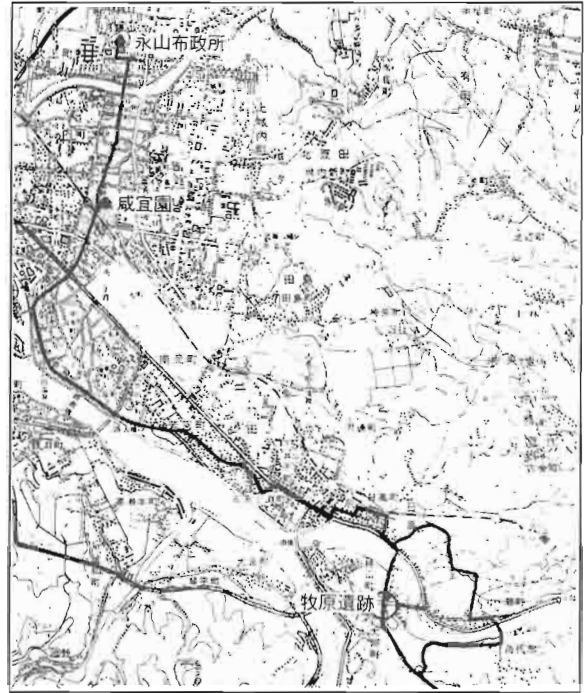
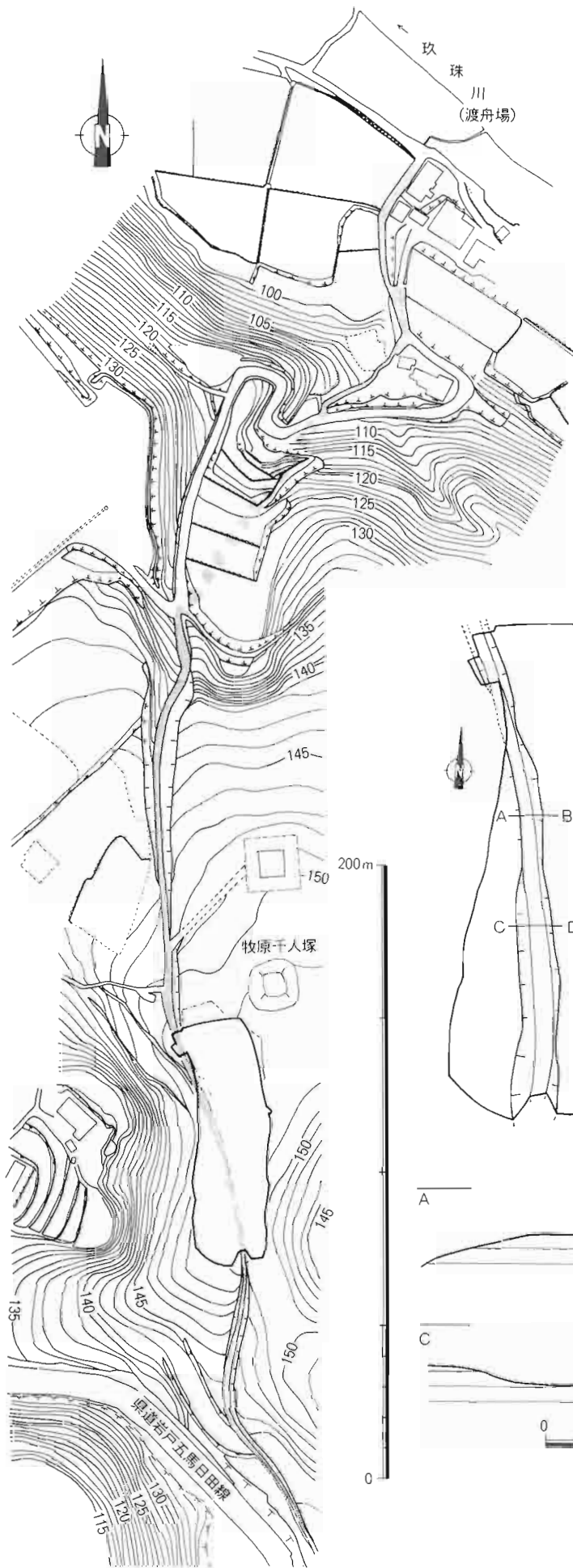
（注8）高橋徹・桑原幸則『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 大分県教育委員会 1989

（注9）田中裕介ほか『慈眼山遺跡（A地区）』日田教職員住宅改築工事に伴う発掘調査概報 大分県文化財調査報告第85輯 大分県教育委員会 1991

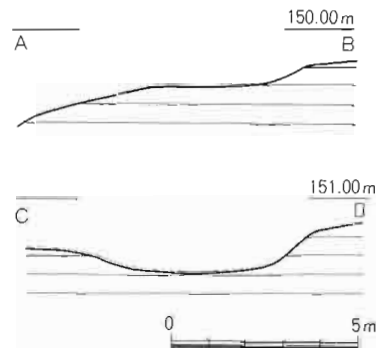
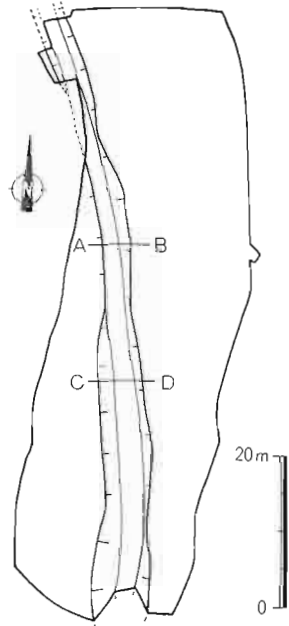
（注10）中野 範『牧原千人塚についての私見』『日田文化』第17号 日田市教育委員会 1974

橋本操六『中世の郷土』『天瀬町史』 天瀬町 1986

（注11）佐藤清洋『歴史の道』調査報告書 岡城路 大分県文化財調査報告第72輯 大分県教育委員会 1986



小国街道のルート



道状遺構



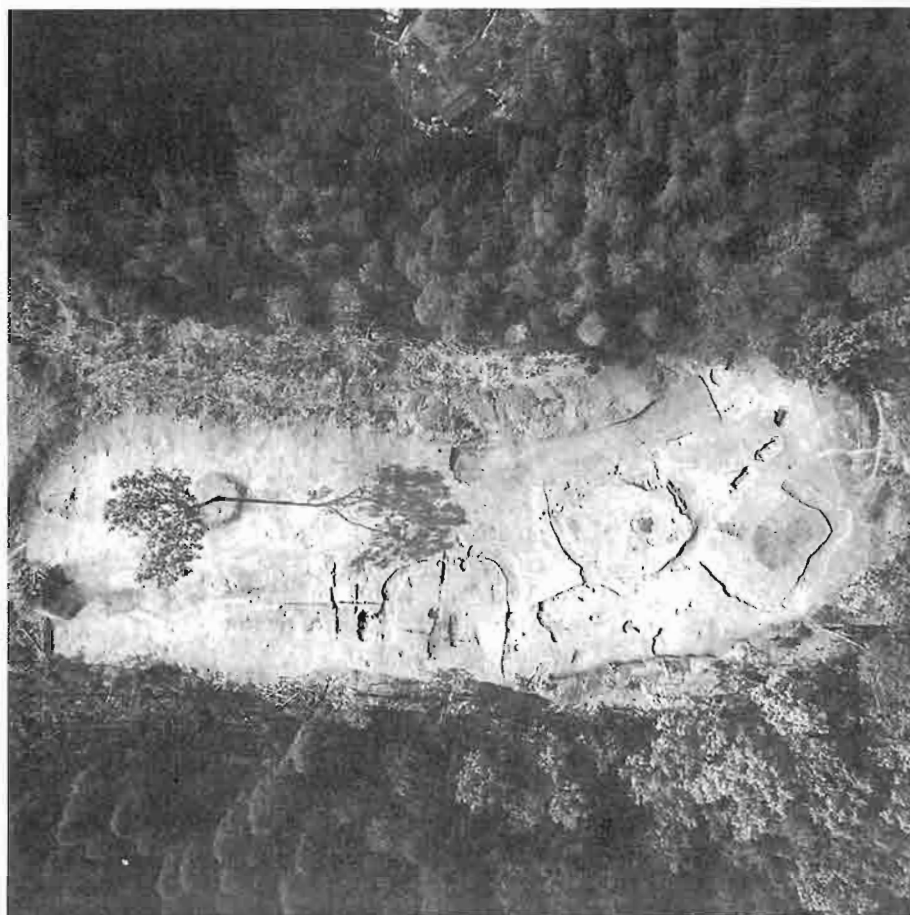
石畳



渡舟場付近

第40図 近世の街道（小国街道）

圖 版



A区全景(真上より)



1号墓全景(真上より)



1号墓周溝内木棺墓



3号墓第2主体部



4号墓第2主体部



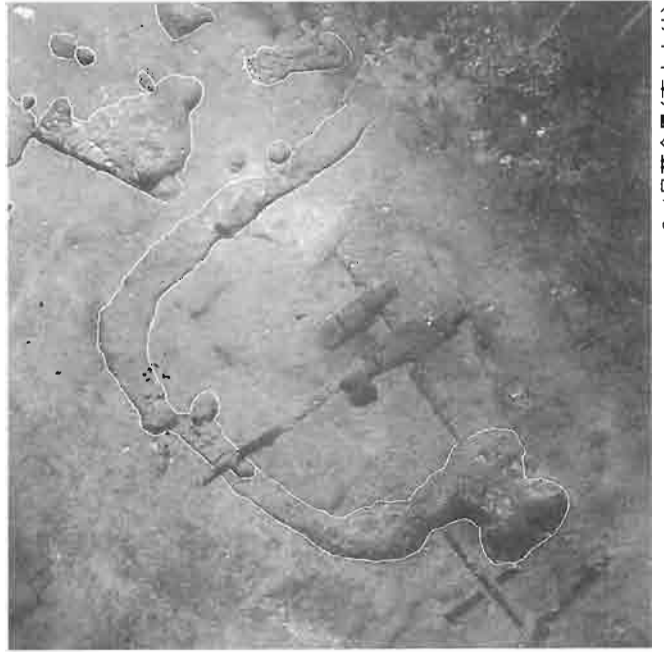
2号墓周溝内石棺墓



3号墓第1主体部



2号墓全景(真上より)



3号墓全景(真上より)



石棺墓



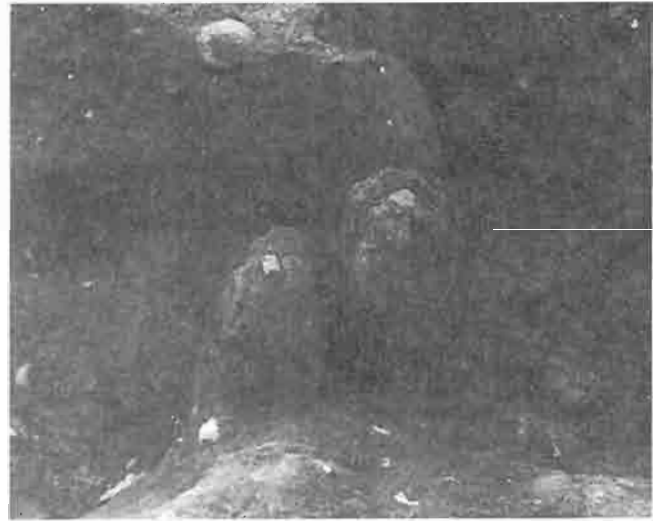
木棺墓



2号土坑墓



1号土坑墓



土偶出土状况



2号土坑



5号土坑



6号土坑



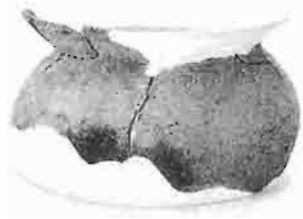
7号土坑



C区調査風景



B区全景(南より)



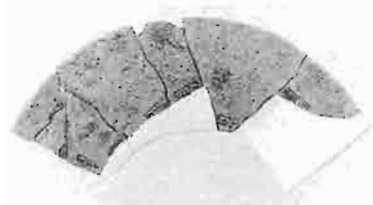
(8)-3



(8)-7



(8)-14



(8)-11



(8)-7



(8)-15



(8)-16



(8)-13



(8)-18



(10)-20



(10)-25



(8)-19



(10)-27



(7)-2



(10)-26

番号は挿図に対応 (挿図番号)-遺物番号



(14)-1



(28)-1



(38)-3



(14)-2



(28)-2



(38)-4



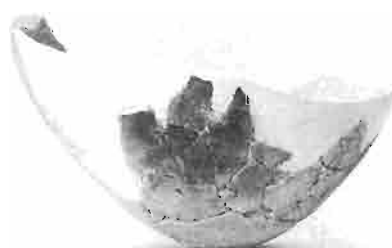
(14)-3



(32)-1



(21)-1



(32)-2



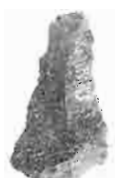
(38)-5



(3)-4



(3)-5



(3)-7



(3)-8



(3)-6



(3)-9



(3)-10

フリガナ	マキ バル イ セキ							
書名	牧 原 遺 跡							
副書名	日田市埋蔵文化財調査報告書							
巻次	第 12 集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	松 下 桂 子							
編集機関	日田市教育委員会							
所在地	〒877 大分県日田市田島2-6-1							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
マキ 牧 原	ヒ タ シ ノ オ ア サ 日田市大字 ヒ グ ア ザ マ キ バ ル 日高字牧原					19940801 ~19950125	2,150	広域農道 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			特記事項	
牧 原		縄文 古墳 中世 近世	方形墓 4基 石棺墓 2基 木棺墓 2基 土坑墓 2基 土 坑 10基 塚 1基 道状遺構	縄文時代の土偶、土器、石器 古墳時代の土器、鉄器 中世の土器、鉄器				

牧 原 遺 跡

日田市埋蔵文化財調査報告書
第 12 集

平成9年3月31日

発行 日田市教育委員会
〒877 大分県日田市田島2-6-1

印刷 尾花印刷有限公司
〒877 大分県日田市田島本町8番8号

